慶明雜錄 戰狀四 十三

關東并總房野奥戰畧狀
自戊辰二月至九月

内閣文庫
和書 類 三一四九一號 三一冊 一五一函 五架

304
7

内閣文庫
番號 和 31491
冊數 31（13）
函號 151 28

国立公文書館
National Archives of Japan

304
7

自戊辰二月至九月

借書四百十五号之四

関東并総房野奥

戦畧状

慶明雑録 四

一番大砲隊戦状

一 一番砲隊ニ而去ル伏見鳥羽戦争之節大砲隊須ニ出張 辰

正月十六日右半隊伏見出立兵庫警衛として出張滞陣

其後姫路城攻撃として出軍候得共ニ而早速落城（城）致候 辰

其後兵庫ニ引揚警衛罷在候処 辰 二月頃

左半隊ニ交代右半隊ハ京都ニ引揚候処東征

伐ニ付候 辰 二月十一日一番砲隊之右半隊并一番

二番三番隊ニ京都出軍東海道押行 辰 三月品

川駅ニ着（着）陣夫ゟ高輪泉岳寺并増上寺且姫路屋敷

日本政府図書

二而轉陣致右諸方府陣中江城交ニ且歩兵隊銃卒
交ニ而ハ御奉行保土ヶ谷迄ハ戦争ニ相及ひ
候得共引取
一 右半隊之儀ハ兵陣済陣中實ニ兵隊相應指海軍ニ而
去三月十二日一番撃隊同船ニ而揚丸ヲ以同所ゟ帆
同十二日横濱江着船同所出立同所ゟ発品川致上陸迄
夫ゟ右輪清邸屋敷ニ而越前屋敷江而轉陣相成候右
之旨清川ゟ轉シ軍艦交ニ而富士艦之儀ハ薩摩

清頭之振ニ付出張無人数寄迄一番撃隊ニ而同振出之交
代ニ而寄付候ニ付指揮致シ候中軍ニ右同所ゟ出張
越前屋敷江府陣中上總屋敷ニ寄迄江戸脱走之
賊徒蜂起候ニ付同月同同所ゟ発海路ゟ進
揚ん川江上陸進進軍候ニ付橋迄押行候間同十日
未明同所町迄ハ味方一番兵方江賊徒之小銃ニ而掛
夫ゟ戦争ニ相成候銃砲ニ而右半隊も陸地江進
軍ニ而同所ニ而合戦致し追々賊徒之進撃ニ而

相懸ケ討而も互ニ挑ミ合ひ進軍いたし終ニ賊徒を
敗逃し同時ニ手針を取り谷田不ニ而戦一隊を以此段々戦
手負 分隊長 川上四郎次 小隊 入江惣次郎 並役 黒田
平左衛門 手負 横死人 戦兵 益満新七郎 生卒 惟右 羽翼 本
文治 追押取ル之處忽ち賊を人ニ而若兄候得共同十日河ニ
出張相成東海道先鋒ニ合併相成候處
隊居ニ而転陣右半隊と一緒ニ而相済陣以下被仰付候五月
十五日上野山内之賊徒追討ニ付御備付同日未明より大下
馬より相図右大一番二番一番遊撃隊并兵具隊与打軍
ニ而湯島天神社内ニ賊潜伏いたし居候處右ニ而若干打立賊
徒を人ニ而若兄候得共寄之候條山内ニ而遊撃ニ而賊徒を
小銃打掛戦ニ而打取り以後右半隊大ニ徒町通り右半隊
黒門通り廣小路ニ而押掛り砲發いたし賊徒を山内柵木
且砲臺を築き石楯として大小砲發烈しく候得共無遠慮
砲打合一日奮戦四方ニ大ニ粮を用ひ候處賊勢
進ミ賊徒之砲銃を措き候處より黒門左右ニ進ミ

附込ニ狙撃シテ討死ス依之猶大小砲且弾薬
并旗幟輜重ニ至迄山内ニ棄置敗走ス七日午
迄モ以テ無事ニ姫路屋敷ヘ引揚ケ此日ノ戦ニ戦死
戦死 隈元孝一右衛門 手負 但長 岩塚彦四郎 戦死 吉田新（成カ）
右同 源福喜太郎 同 津留八之進 同 松元甚之丞
同 西田彦助 喇叭役 肝付休四郎 未年 盛昌吉之丞

岩井宿
宇都宮

二番大砲隊戦争ノ大畧

二月十三日東征トシテ右半砲隊京都ヲ発軍東山道ヲ
通行シテ三月十二日板橋宿ニ着又四月十七日迄滞陣ス
十八日ヨリ二砲車五番隊同行ニテ板橋ヲ出兵シテ
上野ノ方ヘ向フ同廿日一砲車又板橋ヲ発ス六番
隊ト同行也同廿日二砲車五番隊ト同シク下総国
岩井宿ニ於テ賊兵ト戦争ス此日賊兵河野宗
八ト名郷士一人死ス又一砲車ハ六番隊ト同シク廿二
日宇都宮ニ於テ賊兵ト戦争ス此日戦死無之
閏四月廿四日迄宇都宮滞陣同廿五日出立奥

白川

河方ニ進む五月朔日二番隊四番隊五番隊と
同しく白川ニて戦争此時戦死半隊長小野藤太
傷戦兵伊東權兵衛 猿渡嘉左衛門 佐藤原八郎
有川二平太 有馬彦七 四本十左衛門 町田熊次郎
等也又白川ニてハ五月廿六日雨天二度賊襲来
戦争ニ及と負死傷無之六月十二日迄白川ニ滞陣
同廿四日金山並棚倉為進撃白川ヲ出軍此日
賊ハ僅ニ戦ひ棚倉城を自焼して散乱ニ死傷

棚倉

無之七月廿二日迄棚倉ニ滞陣同廿三日棚倉を
発して三春へ向ふ三春ハ不戦して降伏ニ及ふ

二本松

同廿八日三春ヲ二本松へ向ふ翌廿九日二本松攻撃朝
時ニ落城ニ及此日戦死分隊長有川藤七郎 備中宮
里仲庵也八月廿日迄二本松滞陣同廿一日出起会
津の方へ向ふ廿二日ボナリ峠を越て前代ニ相同
廿三日会津若松城を攻撃此会津ニて手負
竹下為熊七新納宗吉へ谷村雄七也九月廿日
父子降伏依て翌廿日若松出起白川より東
京東海道を経て浪華より洋船ニて十一月
廿二日本ノ濱ニ着港

臼砲隊戦状

辰二月十三日京都出足木曽路通行致同三月十三日
東京板橋駅へ着同四月廿三日宇都宮城へ六番隊弐
番砲隊臼砲隊并大垣一小隊致攻撃候処賊二千余
ニ而時ノの台場厳敷致防禦候処直ニ台場賊兵
ニ而堅つへ攻撃いたし候処其外時分賊後ニ廻り賊兵台場
へ致屯集尤四方へ相廻りひとしく致砲発候付備ニ軍隊を
以一之台場の賊追払兵粮玉薬等御使ニ而上攻撃の外
へ一度ニ而通を撃御手其外直ニ追払右ニ通兵粮玉薬
等御用又其堅へ攻掛り其外七ツ時分戦力五番隊共

州兵隊江續ニ付候氣ヲ厳敷及砲發候処夕方落城ニ而
半兵上壬生ヨリ因州一小隊應援相成候

一辰閏四月廿五日宇都宮出足白河應援として大田原一泊
廿六日芦野江至翌二日滞陣白坂驛ヘ罷當宿ニ於て四番
隊五番隊追付候処軍議ニ相成同五月朔日白河攻撃ニ而
定候処ニ東海道先鋒ハ當隊一番砲隊一門臼砲隊ニ進追
付翌日鎗三方ヘ分れ攻撃ニ而半臼砲一挺ハ右街道二十挺
一挺ハ本街道ヨリ攻撃白川町口ヘ向候処賊厳敷致砲發
候得共指揮ニ掛り候処弾薬之指發ニ掛候処都て討
其又ニ白坂驛より云寄數發ニ掛候処賊兵も八ツ時分より

追て散亂いたし終ニ白河落城いたし候ニ付當宿ヘ滞陣ニ而
守候

一辰五月十六日未明砲聲甚敷ニ付斥候として一人差出候処
直ニ立場賊四方の山ヘ責掛候由注進有之候ニ付東根大砲
一挺ハ十挺押立いたし一番候象川村世平郎ニ行逢臼砲
隊ハ湯本街道ニ堅候根据付湯本街道ヘ押出候
処賊兵數多責掛候得共大砲并ハ指揮ニ掛右の場
所ハ大垣藩一小隊倍ニて相堅大垣も大砲ハつゞきて
共ニ大小砲ニ掛り互ニ及砲戰ニ候処兵勝利を得候
係無覺束候付軍議を整へ大砲臼砲ニ而據大垣も同

損して小銃を以て進撃頻ニ及苦戦候處賊兵敗走いたし
候得共致戦夫七ッ時分兵を引揚此戦ニ監軍田代五郎
左衛門致深手負候

一 同十七日八ッ時分より奥州街道へ砲撃ニ出張より
寄者も外番隊并見習田原雄之助越應援罷出候
損中其道ニ横ニ臼砲持越候処金田寺山より臼砲ニ而掛
互ニ致砲戦候処外番隊小銃ニ而攻撃ニ相成賊兵ハ
大屋地村迄退キ右の場ニ而仙臺街道より攻撃ニ
出候四番隊ニ出会同所ニ而暫時ニ相戦大屋地村迄責
掛右場ニ而焼拂候入迄白河踏ニ致揚候

一 六月十二日早天砲撃ニ出張より湯本街道へ張出候
処ニ而一方ニ而頻ニ砲戦いたし候故應援ノ為ニ而致攻撃
候処暫時の戦ニ而賊勢破れ夫より一里位進撃いたし
右場ニ而火を掛焼拂七ッ時分兵を引上候ニ而餘達可申
々の戦争ハ其ニ候処先略又仕候

一 辰六月廿四日棚倉へ進撃ニ相成候処 関山与云高山より
大砲ニ而掛り候処先鋒道金山其外諸所の台場ニ而
致進撃候処 八ッ時分落城ニ相成候同夜五ッ時分金の子
ニ而賊共集の由ニ而致追撃候処実早迎去候得共同所陣
屋焼拂其後致帰陣候

国立公文書館
National Archives of Japan

一辰七月廿四日柏倉を發し石河荒田戎神へ一泊ニ而
同廿六日三春へ打入候処降伏相成候付同所へ一泊
同廿七日二本松境小濱と云処へ先御兵隊若殿の由中
本庄援として御番砲隊兵具隊半隊臼砲隊七ツ時分
出兵途中ニて先御兵隊小濱敗城逃去候様ニて陣所の
処へ引掛同処ニて評議を相極又候先鋒も小濱の根引
色〔延〕石庭ハ當駅番兵本中巡邏ニて夜を明し候翌朝三
春の根〔兵〕引出候処中本松相見小濱の兵より中立二
本松攻撃ニ評議相極三春より當宿又ハ本営の根
兵隊入同廿九日小濱發し二本松へ致攻撃候処城下迄

川向ニ台場築造及防御候得共悉く蹂破の暫時の間
ニ二本松落城ニ相成城を討取事不少候隊中ニハ手負
等も無御座候
一辰八月廿二日二本松発足玉野井ニ而一泊同廿三日未明玉野
井出足石筵より官軍三方へ相分れ臼砲隊ハ御当砲隊
一所ニて坊成峠ニ而両面攻撃相成候処諸所へ台場築
造候得共暫時の間ニ蹂落し大原と申所へ繰陣同廿三日
九ツ時分大原発足猪苗代へ打入候処城より使屋焼払
逃去候付一泊同廿三日未明發軍守床の内指六橋を
越候処敵ハ引退より戦相始直ニ追討いたし出口

時分若松城下へ打入候処籠城致候ニ付頻ニ砲戦の
処八ツ時分土師孫一手負夜入時分九田森右エ門戦死
夫より毎日の連戦ニて既ニ三十日同隊休相成候
一 辰閏四月七日弐ヶ所へ致出撃候得共手負等無御座
候同五月十五日江戸東叡山へ出撃致候節小隊肝付
十郎深手ニて後日死去小隊岩永村十郎左ヘ致手負候
右者戦争の次第可申上旨致承知候付大略如斯
御座候以上

巳四月

臼砲隊小頭

児玉八之進

一番小銃隊戦状

一 当隊ハ徳川慶喜追討として東海道先鋒被仰付
同二月十三日京都出軍いたし三月十二日江戸へ着陣致し
候処慶喜謝罪依て城請取等の事件ニ手数時
の間滞陣いたし候処四月三日四番隊府脱走兵五
六千騎も有之市川村舟橋宿へ屯集の趣ニ付
賊兵屯集いたし伊州藩備州藩徳州藩兵隊繰
出し戦ひ申候得共苦戦の由ニて右應援ノ命を蒙り
直様繰出舟橋宿迄進軍いたし候処賊兵
敗走ニ及ニて当宿へ一泊同四日馬加迄進軍いたし
申候処人馬兵粮等の手当方申付候処

五井宿ヨリ姉ヶ崎

兵埴下迄五六里も隔たる大多喜城下迄探迄一泊の上右の
手前等有之て同所ゟ千馬と申宿迄進軍致し諸
処探索等有之候処賊ハ五井宿迄賊兵共軍致居候
始末相一遊撃隊并斥候隊探索ゟ同方前隊
及び三番小隊御先鋒隊并ニ諸藩兵隊と同ニ千馬
宿探索ハ八幡宿迄進軍ゟして候処賊ハ突ヶ襲来り
一遊撃隊戦争ニ相成り申候ニ付一統烈しく戦ふ
一発ニ打掛り申候処賊兵五井宿迄既ニ走りて押詰申
候処川向へ茂場等築き頻ニ防戦ゟして候得共
味方烈敷進軍ゟして申候処賊兵大敗走して

上野戦

川ヲ押渡り三里間追打ゟして候処賊兵の大勢散々ニ
被打散姉ヶ崎辺迄引揚ヶ賊兵城へ一泊同所ハ八幡
比前埴を探索し木更津宿迄進軍ゟして申候処
右所々の戦争ニ破れゟして候処毎路より逃走り
少数勢ニて賊兵一人も残り不申候所々探索厳しく
仍て帰陣ゟして同十日渡海して江戸へ帰陣被仰付五
月十五日武州上野の寺ニ於て兼而徳川の脱走兵五
六千餘も少半右討手被仰付未明より大下馬ニ操
出申候処上野の黒門通西向ニ掛り口ニ於て六
字迄大下馬操出し黒川口より炮撃ゟして候処

突早賊兵方より大小銃砲発し依て当隊ハ撒
兵ニ而黒門口裏手へ兵を伏せ頻ニ暫ク此迄攻戦中
於此処迄も雖険見え候中於而より各隊属銃黒川
西面より能近ク厳敷攻撃して賊兵を諸方へ追散し
台場ニ々を乗取火の手を上け中於て兵隊相纏メ
於折節迎ひ賊兵黒門西面の後へ突廻り砲発いたし
候ニ付当隊ハ此賊兵を追散し賊兵逃去り候ニ付引上
各隊兵を集め江戸口へ帰陣候

一番小銃隊戦状

一　五月廿九日江戸表出立ニて同六月七日奥州白川へ着陣此
当所滞陣中賊兵の大勢諸方より襲来ル事両
三四度ニ及ひ其中於而先或ハ追撃或ハ防戦して
大勝利を得候中於八月八日白川出軍ニて奥州
二本松へ押出し同十一日着陣同八日当所を探索し
玉の井と申所へ進軍一泊諸方進軍致して掛り口
を定め望むる賊領境ホナリと申所ニ於ける台
場の堅固を攻抜き手術ニて当隊ハ著名の関
道を経て突出於而兵突早西面ニ味方ニ被
於教進ひ賊兵を雑子ヶ原と申所ニ進追撃して

与荘苗府へ宿陣候翌廿六日八字比より出軍い
たし猪苗代へ休息いたし申候処翌早朝より於中
十六橋にて四番隊及ひ御先手隊戦争ニ相成打
直様進軍いたし候処賊兵敗走致ニ付苗
代へ宿陣同翌廿七日六字過十六橋進軍押
詰ニ戦争いたし十字比ゟも此処滝沢峠下
ニ而町口より出撃致し進ミ甲賀町通押詰候処
城内より突出防戦いたし翌廿八日七字比迄奮
戦して二番小隊と交代いたし市中の宿陣へ
兵を引揚休息候処同日夕方各隊を分堀迄引

揚武家小路越ニテ城掛外郭を可守様命ヲ蒙
り右の場所見張当番ニテ堅メ相守メ三十日計
力間遠戦いたし候処賊降伏いたし申候間
九月廿四日迄ニ而凱兵を引揚同十月十六日御出
本へ帰陣仕候

右　監軍中村半次郎河野四郎左衛門

二番小銃隊戦状

鎮撫使有栖川御宮関東下向付随従之筈ニ而去
二月十二日京師發足東海道通行して東京ニ趣諸
所滞陣等致し同三月十三日目黒ニ罷在白銀瑞聖
寺并増上寺丸ノ内姫路屋敷ニ転陣同四月三日野州
表出軍之處兵多應援東京府之下総國結城宇都
宮ニ賊起って東山道ニ向ひ四番五番六番隊戦争ニ依
て奇り同六日野州雀宮へ罷出則形勢を察し当地ニ賊兵
敗れて無事なり然処翌七日総督府より御軍議の旨有之
兵隊東京へ引揚ケ様御使番を以御達ニ付直ニ東京
迄の動静を伺ふ総房の間ニ乱賊蜂起り出兵致事候

殊ニ親ては遠路之地へ致出兵候処平定の後ニて一統残念
不少折柄去る総州へ可相向由ノ談ニ付当所ヲ立同九日上総
国東金へ着候処総督柳原侍従同国長南へ御出張ニ付
半居当地の事情を申伺候処大多喜松平豊前守来御泊迄
無之明日御出馬ニ事済付出之節ヲ御勤候被仰渡候依て
夫ヨリ直ニ着陣当城降伏之段粗申来候ニ付及早
宮ニ付翌十二日東京へ着陣同十三日総督府
奥州表へ赴応援として被仰渡同廿日宇都
宮ヨリ白坂へ着陣候処四番五番大垣長州奥州白川屯集之
賊徒攻撃の様子出会其五月朔日四字頃白坂出
立三字頃より白川へ攻撃ニ相成才開頃より二番四番ニ而

六字比本道より旗振ニ始二番四番ハ棚倉街道を横切
白川の右横山手より進下をして攻戦を町口ニて監軍飯
牟礼斎藤戦死山本吉蔵川畑金右衛門市来森十郎
時任金左衛門手負右後七ツ過戦死且賊左の山上ニ登て
防禦之一番二番三番分隊是ニ向ふて戦ふ賊敗走ニ逃
て関門ニ入る其節戦死有川弥八郎手負ニ付四分隊ハ
初発の町口より進ミ宿中へ掛る夫より諸道の隊一緒ニ
半城内へ突入候処以焼失の賊徒致退散候付
兵を園メて道筋へ宿陣其同五月十五日白川より奥
路二里計半大田川と云ふ所ニ賊屯集の由聞へ依て二

番四番半隊ハ先刻大垣勢と巡邏として原地出処
彼より砲発致し別ニ一方ハ間ち宿内へ掛る賊悉く逃去る
其節東八助之亟戦死火を放て賊営を焼払登白
川へ引揚ケリ同夜山口より来りし賊四方より襲来て白
川を囲む二番隊ハ東京街道を守る左ニ大沼あり沼
の端を先兵守る賊頻に攻撃左半隊左より掛り一番
分隊ハ右より掛て援兵を求む其時三原七左衛門田猪
之助夫卒金五郎手負ニて賊敗して搬重をすてて逃返
夜の十二時比望場所へ引揚ケリ同夜七ツ時同日の様ニ賊襲
来る二番隊ハ非番にて御兵具隊と共ニ大垣之応援

トシテ金勝寺山ニ於ル三ケ所ニ開き谷を隔て砲発致す
折四番隊大垣勢本道より進て賊を突く此より進撃
其節土州兵援て来る双方より責討賊敗れ会津街道
大谷地村と云ふに取り足を留めて支る三方より打出
たへ兼し又敗走賊兵西若松へ美坂彦六手負たり
火を放て夜入迄白川へ引揚ケリ

三番小銃隊戦状

一 閏四月三日上総八幡邊ニ於て伊州備州の兵徳川家
脱走兵と戦争因て同日九字比我隊一小隊応援
すべきの令ニより即刻東京を発し葛飾市川の渡口へ
至れハ伊備の兵云八幡ニ於て戦ひけれ共援兵なきの
故を以て此地迄退引しか賊跡をしたひ川を隔
て接戦彼レも略て発銃を止む意ニ退散せ
しと云ふ時ニ市川宿炎焔天ニ漲る是賊隊去べき
の様ニ見ゆると我隊移て川を押渡り且火を衝て
追躡中山の法華寺へ押寄る賊銃刀弾薬ヲ捨
散ニ落チ去しと見ゆ一番隊半隊も続き合して又

跡を追て船橋宿へ入り口に至れハ彼方より旅亭の
兵鎌ケ谷より佐土原の兵隊出発致し候処會時に
賊より指揮致し砲を放ち宿中へ隊入りに悉く逃け
去て唯手負のこし人家に潜伏日貴寺其他に宿して

一　同四日進軍賊跡捜索して拠地を得たる同日下總
國佐倉の領主堀田相模守城下に至る國論の方
向を察し又賊の巣窟を探り更に勦鋤の策を
決し且金穀の用を辨せしめんか為也同六日同國千葉
へ転陣

一　同七日全軍上總五井の手前に又八幡と云宿あり
到る間もて戦始り賊麦畦へ埋伏我隊其一番隊
半隊山跡に添ひ横を撃後を取切んとせむ賊撲
を察して引退き五井の内諸この堤塘を拒し防
戦するを攻撃賊敗て退却を失ふを山原に
撃ち散し或ハ海中に逃ひ入る復々姉ヶ崎の賊は
攻んと我隊ハ街道より左り西面他隊も各攻口あ
つて押出して賊堅壁を拒し一隊に分散の兵を置き
我兵の至むを待交類に発放たるを奮戦衝突し
て堅に迫入賊拝傷たること能はす敗走したるを撃
一里許にして止戦

一賊の巣窟房州木更津なり故に虜んと同八日至軍
艦海陸より既に逃遁して唯家馬猫童を獲の
み同十日東京へ凱陣

三番小銃隊戦状

一五月十五日東京上野の賊を虜んと六字比湯島へ押
寄け賊もへに上野正面通り戦ひ始しより我隊横
合に出奮戦して遂に黒門前町口の胸壁を攻破り半
隊押留し家に以て己の壁とし大に戦ふ又半隊ハ本郷
より不忍池涯より町家をくゞり敵合を攻附隠
れして戦ふ賊三四十人正面へ突出即チ横撃れ
時に戦ひ甚しからさるにより大小砲一齊に発放を
勢ヲ寄し黒門へ衝入の策決し方ニ至の勢ヲ到り
しゝ本口へ掛りし者州等の兵来ゝ應せん且火
焔後の町家へ迫り進退の便あらさるを以て軍を

西面より右備ハ轉すへきの令ニ依て轉軍ニ就ニ本
御の味方未タ應せス故ニ又決策し各隊一同ニ進
撃累つゝ打破る賊徒を失ひ迯去るを境目縦横
ニ追討せて又賊寺屋ニ憑り或ハ要地ニ埋伏防戦
ゆるといへとも遂ニ攻落し寺刹放火四时凱陣ス

三番小銃隊戦状

一 六月十二日於奥州白川仙臺街道大垣兵持場ハ賊
襲来ニ付応援として探るニ賊山岳を拠し防戦
ゆるを攻撃して其の山ニ攀登る賊防き兼て山を
去て後の山ニ憑る亦防守ゆるを能ク散々ニ追迯
ゆるを会津街道大谷地村迄尾撃又仙臺街道
根田村を指て追討しるるもあり故ニ分を轉し
根田ニ於て相会ス賊山趾野塘ニ埋伏防戦或ハ
山岳より稠密発放我隊奮戦して山趾等の
賊を追ひ散し又山岳の塁壁を砕んと兵を二ニ
分ち攻撃ス賊拒戦せしかとも遂ニ敗し塁壁を棄て

落去ニ付其の賊営を放火し一字ニ凱陣

三番小銃隊戦状

一七月十五日仙台賊奥州白川大垣固場へ襲来援
兵として七字比探出しけれハ既ニ賊の要塚を引退き
しニより隊を二ツニ分け一手ハ仙台街道一手ハ会
津街道と為押寄る仙台街道の方ハ我隊の行
候兵一番隊半隊と共ニ先ニ進ミ賊泉田村の台
場ニ憑り防戦けるを攻撃我隊一手ハ右手の山
をつたひ横撃の策を以て進ミしか行候等泉田の
台場を撃破り追討ける折出合ひ合して小田川
村迄進撃尤五番隊も右川口より小田川手前ニ御
而是亦会津街道へ進ミし一手ハ賊山岳を拒

ゝ阿賀川を乗渡し大谷地村より五六町許尾
撃ニ両手の兵隊ニ十二字比凱陣

三番小銃隊戦状

一 八月二十日会津ニ進軍せんと二本松を発し玉ノ井なる
村へ投宿同二十一日未明玉ノ井を発しボナイ而道
を押凜なる賊の陣を云切るの策にて各隊一同石
筵と云村并萩名の間ニ数里の山径を経賊の背
後へ出しか既ニ本陣敗れて少く落行ニ付会ニ追
撃ニ及

一 同廿二日猪苗代ニ進む賊陣屋自焼して退散又進
て戸ノ口ニ至ル先登の隊既ニ橋を焼て戸
ノ口より五丁許ニて前鋒ニ防嘴を設ク我隊并
十二字交代暁ニ徹ス是地ニ於て当所の台も忘れし

一同廿三日拂暁賊徒ニ関門ヘ寄来我隊并長土の
兵と合し接戦賊徒走遁るを追ふ渡し居候三ヶ
所ニ台場を築き大砲を以て防戦ストいへとも一ニ撃敗
し城下近く瀧澤峠ニ至り弾薬を待テ又進て市
中并士小路を経沼尻打ニ戦ひ終ニ八字比若松城
廓柵近攻附惣勢も追て續き会ひ攻撃ス

一同廿四日暁より我隊天寧寺門を守り持ニ勢至
居日となる處賊右門ヘ掛り城中ヘ帰るの様を察
し頭々伏を設ケ並き様合ニ察し討撃追て近村
三至り又本の持場へ帰る其日迎兵を設ケ嫌あを

一同ニ焼拂の策決し約の如く放火し且發放して以
て三ノ町門より不明門迄郭内の堤を守る時ニ放
火ニ察し賊塀より躍出し五番隊の固場へ懸り接
戦故ニ我隊半隊應援ス

一白川滞陣且會津并二本松攻撃并滞陣中番兵或ハ應
援等の小戦ハ舎て不記

右三番隊戦状終

四番小銃隊戦紀

二月十三日京師出発し東山道を経て濃州加納に着し城主永井肥前守関東より帰国ニ付肥前守殿来りし先人家来よりも関東之情実総督宮へ御届ニ相成候処形勢頗る急として全く不容易ニ付先んして賊兵碓氷峠等之険ニ拠るを恐れて我軍道を越信し兼程せん事を総督へ及建言速ニ御許容ニ依て薩長土大垣因州藩ニ付候を以為命土因之両藩甲府道ニ赴き東山道ニは長藩ハ振人隊長梨羽才吉大垣口振人

一隊ハ長屋並ニ在也三月九日ニ上州高崎ニ城下ニ至正
午比ニ著以為し出張徳川氏陸軍不標札可有之と知識
源助見而ニ速ニ有標札ニ向ても其は除きて其之故ニ
宿屋ニ亭主を呼て客人ニ面会致へき旨を達しけれは
暫して渡辺某と名乗て面会ス其向て我出ニ古蔵片
山西作ねも兵掛り我旅宿江可参旨達して頃ん暫時ニ及へとも
亦知識お崩氏ニ若越同行して渡辺外ニ壱人来て両人ニ（来らに）
向て其云何用ニて当地ニて如此両人云今般官軍御
下向ニ付江戸表ニ御発向方として兵隊を召出し人馬宿
賦として唯た当所へ兵ハを発し候を陸軍不相致旨
若図ニ不取立ニ其ものは無役臣朝之者ゆへ以下隊長古
屋作左衛門へ何篇段取当駅迄付当駅ニ可参旨答へ候条
粗者ニ兵隊を以て御発向方ニ付訳更ニ無之真ニ謝罪
お表ニ戦趣意ニ以て江戸ニ上下一同恭順して妄りニ兵隊を
以て御発向等と可申道理ニ無之勿論候当趣意ニ以て
一下先若図を以てまへき事ニて当駅ニ如来謝罪之旨

立花内之指揮ニ而之銃隊探索致候所実之事之与
両人之速ニ此方ニ内附留而致呈尓付無拠御保護飛脚報
趣意有之は是より兵隊早々江戸ニ還し而中山城古屋
主意此者紙読之可致速ニ両人尓向ニ演舌して東亭高
詩を一字ツゝ発し新町宿ニ四字ツゝ発ス直ニ探索人等
深谷本城迄も兵部少輔古屋進兵之様子も更ニ分らす比
比在鴻巣行田迄兵隊出集之風聞中ニ来ル三月六日深
谷之驛尓至り此之寄附尚前之住人本恩蔭川上豊吉郎を

以て行田羽生陣屋迄も探索ニ及ひ為致候所羽生
徳川氏之陣屋ハ兵隊千五六百人程近日大砲を提隊
業諸荷物而運送之節之般等を民家ニ命して非常
之用意以而し全朝出巨細尓於ゐて此六日之夜徳川氏之
遊撃桜井莊之助淺間附御鴻藤飛而云以而し談を
之為之付我藩宿ニ可來と及返答致候所二名来而云今般官
軍御下向ニ付主人初一統恭順之道相立候趣意有之付
歎願書梅澤孫太郎持参仕候ニ付示談合之儀相願度一筋

来候由ニ付此上何様之変ニ忽備之可致御警衛方として
主従七人新町宿岡本ニ待居候処ニ而也御用向も
陸軍奉行並ニ而中条高崎城下ニ而相越及応援候処程
之偽何も出張いたし候へ共銃之者共武州羽生村陣屋へ兵隊
千四五百人余集り居候ニ付右等之者共不残当所ニ而討取
共及討向候処全く不残候ニ付当所江戸より兵隊三月六日ニ
鎮定之上共申候由ニ而弥相成候ニ付何れ共中越致候
今以不案内ニ而御婦輩も差遣候ニ付当地陣屋之

不残備ニ取懸熊谷乃跡追ニ而当兵見請候ニ付いづ方
来居候者共も夫々江戸へ可還様当兵隊ニ達し置候処
当所ニ館を除江戸ニ帰り候処去ル十八日へも右様何も無難ニ
上之当所羽生村陣屋を遁候ニ付大砲弾薬并弾薬等も残不
遁申候ニ付其数之証紙を以て御坐候処右之者共の
付候も此上何様之儀の付候哉も難計ニ付申合謝罷
欲罷以て羽生陣屋之兵隊早速江戸へ還し
為確認砲銃機械弾薬等相下先此等之

右之実行判然ならさるも雖信用可論数多之兵隊
を以て御警衛之事ニ於て理甚急之軍策を施し以て
至儀可有之哉与存候ニ付残横及ひ應援取何分取る兵隊
出張有之ニ付熊谷之報る所役ハ鋒陣を定る一ケ条無之哉与達し置
一方之新倉堀進て及ふる也甚之如く窘を受り此事速ニ鋒所
所役之九日ニ鋒陣を定る事無遠一ケ条ある及直ニ岩桜井忍藩
当在有日時退陣致し七日ニ深谷駅より滞留当所ニ在大宮宿西方之内ニ人数
田幸七ツ半来て羽生村迄或羽聖州之賊勢を告羽生之余

甚頃之勢ひ無之官兵之中軍を襲ふの計策ありと依て諸
方に探索人を出し因て深谷を発して熊谷の前に至
西午之刻過て諸隊着陣ニ及ひしに此兵先ツ到る迄あらす
之合併隊本部ニ於て熊谷駅ニ滞留桜井等迄の之諸賊盡
実を顕すへき事を以て一隊確論行を止て直ニ兵ヲ待
ツ賊兵ハ勢ひの如くに此時一大事之機会之前途ヲ以
て論し而君を征討スルに一変して探索を行田の向ヘ
出スニ兵隊迄に至り二大隊余之行田を過て利根川を渡し

て御節使衛府に向ふとの報あり賊兵の謀計おは刺
物也依て其大垣の守備隊に通し在之人を請て當夜
五ツ時比熊谷の驛を發し三更の比利根川を渡り暁に
吉田驛に着く驛に在る賊兵之動静を尋ぬれは是より
三里梁田驛に昨夜止宿しかるに及んて千四五百人余屯したり
とて驛より通しと告く暫し兵を止めて大垣の兵を待
合ふ此に賊の兵粮手當之吉田の驛に告來ん者を何す
加り候て名役人告之我寄兵を有りは是より進て來所とふ言

を撃ふ利ならず下との論に決し飯食等を整へ次行進を
速めて其兵は陣人ハ梁田驛町の方より大砲を破し大垣
隊先鋒とし其之我兵先に進みても行り我手山崎八郎兵衛
して御之番兵を撃と是より二層の兵隊の正面左右田畔に
散開して戦を初む時刻朝四ツ時過ぎ時近戦敵砲銃
を以て防戦すると左右横合より不意に町家を突入り敵を
狙撃すとも寄り敗走や當驛川を渡りて後陣を討せ陥
ては敵味方とも分ちえ我寄兵よりして突き雲霧天幸と

以ふべし戦ひ暫時にして賊大敗して逃走せるを追撃し
兵を梁田駅に揚げて宿陣す此時戦死樋口豊助坂元彦助
手負四人也賊の死體百十三人ありと宿役人共の密書十日早
朝梁田を発し熊谷の駅に陣し葬式を行ひ同十三日
江戸ノ板橋宿に着陣

付使隊

薩州藩

川村与十郎

其他兵士面々

去ル三月九日於野州梁田駅一戦賊徒及敗走候趣征
東初度之戦官軍御勝利之段全く以其藩諸士尽力之所致
御感悦被　思召候尚此上精々可励忠勤旨御沙汰候条
一同可被申聞候事

東山道先鋒惣督

三月十五日　参謀

薩州

右野州梁田駅ニおゐて賊徒屯集砲銃を以て要地之

撫り官軍を相拒し候処遂勇戦忽及掃撃候ニ就ては
保之軍之気節をも與し現地之情実速
叡聞
御満足ニ被思召候猶此上精忠速ニ賊
巣令平定可安宸襟旨被　仰出候段相達
候　御沙汰候事

三月十九日

三月十三日江戸板橋宿ニ着陣同十八日飛鳥山ニ転陣
致転陣四月廿四日迄滞陣ニて廿五日出立宇都宮迄出張之

形勢ニ付彦根藩小山ニ於て若戦之由ニ付五番六番小隊
援兵ニ差出し諸藩熊谷宿御滞陣として致滞陣候処諸ニ
会戦報ニ付右之通ニ熊谷隊ニ出張ニ御賊候処同日ニ右之御
延引ニ而未タ当番発軍同ク廿九日宇都宮ニ被為着陣
閏四月
同四月十六日尓昨今宇都宮真岡迄城兵出て見候事
然後旧幕之代官山内源七郎宇都宮陣ニ報告賊兵之
衆寡分明ならず候得共過日房総の一戦ニ敗走し今ニ
を落して落来ハ敗兵ならんと鬼怒川筋迄押出し待候節

十三日 て探索に及ひし十三日昼比守殿宮を発軍安達川に出張す夕
景に委しく同心よりも尚真黒の情実詳ならす故に帰陣し
て賊の動静を探索せんと猶安達川辺に請人とも更に其
事に勤むの志なきのみならす慶安の余党ならは土人も相ねて
深く誤る是也勢ひにより反て既に危ふまれて実に恐怖と云ふ
十五日 両し同十五日に及んて真岡の賊兵散乱して吉田原領黒
羽領之間道を通り鍋掛越堀宿して逃れたるを追尾て来たり四ケ
原之掛り三斗小屋口より会津領へ落行しとの説十五日に

十八日 至り詳ならす安達川より守殿宮に至り実地を告ぐ同十八日
進んて佐久山の駅に次す同日出立一小隊四拾人吉田原駅に出て
付候として宇都宮の当兵を追撃し御兵粮念ヶ居を長蒲
十九日 探偵報之出役を以て賊兵已に又那須十九日之を会津境より追て
兵器探索して切迫之賊勢を告直に深川居家高久島辺より
馳て其の情を申云弥賊兵三斗小屋口より探索し黒羽領
之板室村を出るの根拠として吉田原領上油井村百村
廿日 追々会を分ち百目鬼来之勢ひ也と云ふ同月廿日進て吉

田原之臣官路等本陣に重臣吉田原將兵を率来て飯田の
危急を告る又黒羽藩村上一学大沼渉等を率て板室
遣て飛脚百姓兵を雇ひ糧卒之家を濱ける二賊兵も田原隊黒
羽隊を襲ひ取り要地に盤踞して官軍を抗拒するの勢あり
と傳し両藩の守備厳にせんと議論して尚賊兵の進止
を飯田百姓兵を以て探索すへしと云ふ此時賊之勢ひ熾
にして其をは殊し易き後ち時は大に失策あるへしと
の論あり明る十一日板室村の背後に突出る時は敵根
損して寡兵を以て衆を撃に必ス百勝の利ありと
又云ふ板室村より塩地を過ては廿丁に至る山路を
枝路をは除後労もなく殊更険阻にして路悪しき
のところ依て百名両藩に命して賊の走を絶して
其を夜ん其敵兵し却て背後に出る時は大に機を失ふへし
然る時を捕ふ可し又吉田原士民之相当に二里余之塩の
崎村に賊兵押来り候藩士来り告ま板室村背後
の後撃を止て除明暁塩之崎村の進撃に必ス吉田原の

跡を函嶺に発し宗貞野ケ原野径踏迷ひ漸く飯
到り向ふ塚ケ崎村ニ到ル是は昨日百人許来て今亦三百人
賊追ひ来り兵粮手当の申付近村々より追て粮米を運ひ
来る其の内入ル場所尾州出家拙割して長大垣三藩ニ
兵を分配して板室村口ニ通路ニ埋伏ス四ツ時比斥候四
人来りしを是は捕へて斬首其余兵も本隊ニ三百人余押
来り此伏兵一時ニ連撃ス然関屋口の賊兵二小隊經村
裏に来り賊へんとして怪我隊来りしを亦一時ニ連発し

て追撃ス時已ニ夕方ニ也けれハ此夜陣を停て民家ニ
宿ス中村新田ニ於ル戦状之戦ニ應接ヲ漸平定し来て
廿二日
又金剣を被り路切所を閏廿二日晴飯前時分より板室
村ニ至ル軍ス上油井村迄を奈須野ケ原山林平原廣地ニして四
里余の道程なり油井村八町余手前ニ至て土民ニ密ニ遣して油井村
板室村之兵之様子を目的ニ守まる敵の埋伏を熟念して
三藩の兵精鋭を以て三拾余人林中を散布して進む油井村
四町余前ニて賊の斥候を見掛て追撃ス直に油井村ニ

賊兵を打拂ひ大敗して　ゆくゝ村ゟ臨地ニ拠り必死
防戦す此地西南急流の川巾凡四町余の濱を隔てゝし
場所なれハ難所の地形之砲を正面ニ備て川越挟ミて連
撃ゟ乱決ニ深川彦兵衛二階堂右八郎尤近元〔允〕隊長擬山覚之進
森岡四郎兵衛府清二野津西之進重久雄七　八木彦八郎河野
仲五郎川上周蔵林川の上手城海り巌石を越へ遂て漸て敵の
背後山上ニ突出前後より合撃されハ敵大に狼狽散乱
敗走しきゝ撃ち西南之兵一時ニ進て追躡尾撃して抜塁

村の根拠を攻撃ス西南ニ砲を備へ防戦すれとも終ニ敵
しき兵小倉口より会境ニ退去す此一戦背後之策なら
ずば日を延て攻れとも険要の地なれハ容易ならん実に背
後の功といふへし戦ひ敗れ時化より始て豪雨ニて殊ニ敵を
殺撃せること頗多ニして愉快の一戦之味方も負森岡
其外二三名負傷す賊兵を焼拂ひ村ニ拠り高原野原辺ニ
湿泥暗夜ニして十里の路程なれとも漸く高田原ニ夜明
時此より備律ス鎮ニ至通ん其日ニ川越被落すといふ堅

（廿三日）
廿三日吉田原ニ滞在追々探索モ有之落城ノ様子詳ナリ同
日夕白川ノ賊吉田原ヲ距ル三里余ノ鍋掛越堀辺迄進テ
来リ不日押寄ル勢ト黒羽藩ヨリ注進ス芦野迄ハ五
里余ニ及程地形モ悪シケレハ賊若深入来テ抗拒スル時
（廿四日）
ハ大ニ損害不少トノコト也翌廿四日全軍ニ決シテ当駅
吉田原ヲ去リ此所ヲ発シ五里余北芦野駅ニ宿陣ス
直ニ白川ノ動静并ノ衆寡ヲ探索セシムルヲ芦野藩命
ナルトモ白川落城ニ及ヒ奥州野州ノ境ニ明神アリ

夫ヨリ土民ニ報アリシモ反ノ人ヲ欺シ間者ヲ入レテ一志難シト此
時ハ是ヨリ奥羽ノ諸藩叛逆ヲ企テ会ニ明ナレハ落城以後三四日
ノ間ナレハ何時モ此様子ヲ失ヘハ落城セシモノハ奥羽ノ
真実ノ様子ニ可有ヿ地形ヲ粗探索シ長兵一中隊大
（廿四日夜）
垣回負寡兵ナレトモ夜襲ノ後整武急ニ出テ芦野駅在
留リ此所ヲ発シ五里余ノ境明神ニ至レハ漢兵ヲ領
ト大木ニ出テ彼賊兵ヲ捕ヘテ斬首シ亦白坂ノ駅ニ
於テ賊ノ間者ヲ殺害シ小丸山ニ於テ三藩ノ兵ヲ援ク

んとする當時速而居ても悉發のことなしに五里余之路程
隔りし時夜に入りて昼夜十里余兼行し速方之戦ひ夜營も
不爲に三藩の兵遅速も有りしに夜襲の攻撃時刻も定まらし
行を止めて兵を揃んとせる内に當番の斥候隊河野彦助
一列正面の岩つゝこおゐ之敵兵おを立て眼鏡を照して我
半を知む距離僅に四五町にして無之速撃を受け砲聲
を聞くや本隊も續りて右之方に進之一番分隊大沼の邊り
少松山之間を經伏を張り半隊大沼之右を進んで雷神山に

登り伏兵攻撃山上より之を擊時攻戦に正面岩つ構子より
攻撃されとも兵寡に爲して空寡兵攻ホ居より還る時刻も
昼時なり正面より突入しに未明より若戦敵を對するを隔
之距離なれは息攻[illegible]居に寄て取て百餘余之隊兵も居
果一同奮起大聲を發して烈しく攻戦隊より砲臺を奪拔一
時敵攻追拂ふ於此死傷不少實に死する者河野彦助
深河彦六郎中原休右衛門池之上新八二階堂戻八郎田中為吉
郎元飛後之人竹川直枝也此時に進んて無距離なるは拔山

覚之進重久雄七知識源助奈良原源之丞左近允弥兵衛之
隊々も重剣之下而之請ケ持之横濱手切にて死ス奇隊源
之進も左之山手にて本道を横撃する敵と戦ひ既に彼を突
く死ス東肥の兵は戦ふ事ゟ及び寸時砲発も止み路を去れ
とも兵寡にして正面より左右源田子兵には兵数千にして
路を去るを不能の地形にして衆寡の勢ひ一時の奇
廿七日 策を失し塚を抜き守る能はずして味方を芦北へ退き翌廿八
日進て諸隊芦陣芦北と里之里余之白坂部へ陣営を移す

廿七日 廿九日 七日四番小隊白坂に至る同廿九日本営之命にて兵員九
五月初 七百余名は弥必死之隊を組し五月初日に進撃正
面地形よりして彼に戦を交へ動く時は必ず賊砲撃
之術を尽くし兵を存し守勢を持ち左右より進撃せんと
議して四番砲隊半座号具隊並に抜人余日砲隊正
面より進む者在長左一隊抜四人通り地形之要害も有
ましゆへ本隊に至て左の兵を急速に察知せしん
と此地頗の横撃を防くの兵之原海岸は秘せ

番と砲二ツ大垣兵加之兵勢を我二番小隊
四番小隊相合衛門に出て小川の橋合に出ん
とし白坂岩ツ士大平八郎を案内として小川七八
町なる貢象坂之至るとき四番小隊先鋒にて戦
を初め半時ほと攻撃半隊に分施し直ニ奇兵となり
正兵となりて敵固の賊を撃ひ二番小隊と雷神
山之山嶺に会して合共に烈戦し終に囲むて砲台
を奪へり山際の賊を殺戮せる事殆余人進て

西面之砦ニ進ミ突出し左右正面と一時ニ会シ
拔町ニ突入し兵ハ町徃之塁ニ迫りにて戦一
時砲声烈敷戦亦比ニ終る此ときは半道余大
やチ村迄追撃して陣を小川之本町ニ還ス実
ニ愉快之大戦ニして獲首六百八拾級也吾

六月廿九日

月廿五日鳥家追諸在賊兵屯集之風ニ付地形
偵探索ニ出し夜五之内半大垣兵拾人余り我
二番小隊四番小隊此番兵ニ付半隊小田川瀬押

出羽州仙台藩百人余屯集いたし及一戦賊敗走し
秋中を焼払ひ夕京ヶ川ニ向ひ候ス此戦ニ望山
荘八手負也同廿六日原海道一分隊ヲ以て當兵八
為し兵ノ外ニ銃ヲ　時分賊兵寄来り直ニ一隊出
張湯本金福寺奥州本道柵倉海道諸所ニ
相戦四方ヨリ攻来リ付諸方戦ヒ時ニ相始り
登九ツ時分迄ニ至リテ賊敗走し追撃して原海
道ニ至ル湯本ニ於テ軍ヲ還兵ニ通ヒ出場番兵一

分隊ヲ以て同廿七日奥州海道襲来ノ探振ニ
付大垣ヨリ持場人少ニ付テ應援ノ請付半隊
探出の外襲来探ヲ以て奥州海道巡邏として
追分ニ至リ迄出張ス山径ヲ越襲来ニ付伏兵ヲ備へ
討取ニ付攻ニ兵ノ外大垣の兵本道ニ顕し出策要害
有リて敵ヲ初ニ金福寺山手ニ襲来ニ賊兵其ニ
当ル隊ニ追撃セシテ大ヤ千村迄責落し四番小
隊モ共ニ合して追躡尾撃し賊大敗ニ及ニ参照

六月十六日

尓及て同隊ハ六月十六日石川衛庄当番ニ而弘前
分隊斥候当番ニ而在之折柄遠方ニ当リ銃声砲声
相聞候処平山之方へ引候処賊兵押来之様子有之哉
依而我石川本沼之方面より賊兵千人余急速ニ押寄
探兵の山手ニ押寄り二番分隊正面防戦致居候ニ而
当番分隊続来て斥候をやり三番分隊カラメ村山上
より続入りて賊の横合ニ狙撃して本陣ニ突出し
一番遊撃隊正面ニ而賊賊大敗し本沼之辺迄追撃

せし此時カラメ村の川辺ニ而会之隊長井口源五を田中
周蔵討取之両ニ而賊兵一時ニ敗退して日午陣営
此戦ニ手負桜山覚之進林大郎兵衛富山彦兵衛也同
廿三日相馬口総督鷲尾殿御本陣ニ而右事大河隊
の兵ハ本陣ハ勿論艦より海手ニ而應援の兵小名浜
へ廻船乗組致之則之前ニ而攻撃の標根ニ而
平相分松合三春二本松城を海手より攻撃致すの
軍議江戸大總督府御決定之上是迄を白川之

兵革動揺ならされの御所為何とられた板倉
城を捨て海路を完紀会して諸方攻撃一時に攻
せんと忠川の軍議定して同廿四日黎明発軍
弐番小隊兵具隊歩兵は兵実山の右手より金山
宿の横合に出んとして貢象坂を通て右手向ま
本陣秋四番小隊先鋒として進ミ実山麓を通る時
山上の屯兵砲銃を以て射撃すれとも不顧疾呼応撃せ
ずして新会酒村におゐて戦を初む暫時も討戦する事
不能賊兵を追撃して金山の宿まで到れは砲台を設
帯討戦といへとも暫時支へ不能須臾にして砲台弐ケ所を
拾ひ新会酒迄追到て手負永山孫一郎肝付半
左馬之丞栗原半之丞種子島清之助湯之前藤八也又軍を
進て板倉城を距こと二里余にして茶屋を通り我
藩各隊城背を攻撃せんと軍を分チて進撃又城中
討戦する事不能自焼して落去又折しも霖雨に
節なりしは六里余の泥路にして寸時も兵を停ること

城ふりして漸く登り半ばの所に陣かゝおひて少戦

逃去を追撃して陣城此に滞久支ヨリ海手之軍ヲ

七月十三日

報告して棚倉に滞陣ありて三旬七月十三日白川

におひて戦亡七士之忠誠を追懐し聊霊魂を為す

慰塔を献立要銘云

慶應四戊辰中原尚志河野道明深川実行赤

塚真人池之上某二階堂脱カ行信武川某七士戦死実

后四月廿五日也矣期時不幸而進無於白川

城不能抜返陣芦野同廿七日再進次白坂驛

同廿九日変。

恐敵之襲來矣五月朔日蓐食兵三道而進

賊雖盡防禦之術奮戦抜之焉獲首六百八

十二級聊足慰亡魂尓後守白川月余及六月

廿四日亦進撃棚倉城抜之偶七月十三日為吊

七士之霊語七士平生甚有感於此乎献立石

燈一基垂蹟於不朽云

薩州第一大隊

四番小隊

七月廿日海手之参謀棚倉尓来て三春城を攻ん事を
議ス三春は棚倉之路程海手も里数同しく是は
廿四日我軍城郭して同日棚倉を発して弐里余之
石川郡尓宿し廿五日蓬田ゟ進ミ海手は仁井町尓
出合して軍議を定メんとの約定尓て土長の兵蓬田ゟ
上り我軍二里余之田母神村尓進ミ廿六日三春(へ)(付)
届し城主降伏して謝罪尚此二里余之二本松領糠
沢村尓賊兵屯集の由夕方夜半比ゟ是ゟ当小隊四番

小隊六番小隊糠沢尓攻撃ス二番本道ゟ正面尓進ミ
四番は右尓分ヨ早朝ゟ時此戦を初め賊営を囲ミ
一時尓賊兵許多討取賊兵大尓敗走して本宮川迄
追進撃し夕営三春尓帰陣ス当日糠之兵を本宮
ゟ繰出同廿九日早朝五字揃して我軍海手の兵先鋒
と為り五番四番六番援隊まて此外先鋒隊城内を距
る棚町余ニして右之兵を置き正手ゟ棚リ本道空虚を
為り此ゟして援隊意外之先鋒と為る右の紅

柵門より六七町於て城兵五六ヘ山手胸壁を撃ち及ひ
柵門際に砲台を構へ多人数相固め砲銃を打放し山内
四番半隊余の兵は城山を背後より突入正面攻撃一時に
八月五日 して城中放火落去れ八月五日官軍中山口嶽山
越口御霊櫃口母成口地形不見会之国境を固守せる
場ニ兵員も大に相加り中にも母成口を会の国境に送
村之猟師次郎七体之助を以て及探索安達山中之留
及戦者台場之配り兵員の多少分明ならす故速に

会を攻撃せんとの軍議を素より賊之巣窟を敗
砕せるときは枝葉枯落せるの軍議玉川滞陣之営
六日 発なれハ八日六ツ時玉川に進し八日之進入我カ白川之熱
十五日 軍同十五日方より前陣薩兵母成口より突入にし
空発なりしは土長大垣の兵御霊櫃口ニ進之勢至堂
振乎兵代ニ突出と二本松兵を分り之論あり此時各
藩勢れ武ニ四百人余なれは地形不座し兵を
分て二本松より猪苗代を利すへしとの論も有れ共地形

に従て分砲せんとするも亦失策なるへし中山口ハ
大砲なれとも左右嚴石にして進て敵兵の地形に　巌カ
阿られ嶽山口ハ左右小笹山にして攻撃に不利乃難ハ
之土長之兵御霊櫃口より攻撃せんとの軍議あれと
いへとも於此我藩之建論中山口ニは虚兵を設け茅房
宗口一道より各藩力を合せ一手として國境に突入り後会
砲之策を施さはらし之要所を可奪據まては空拉
然戦之建論にして　猪苗代城を破り賊会を進撃して
要地に陣を止めて此様の建論へし不意に出は必れ
敵狼狽して敗走すへしと論再建して各藩熟勢
本ノ　房宗口より進軍に定る同廿日未明二本松を發し
四里余之玉の井村に繰出屯集之處会と薩九番小隊
本ノ　土長兵共大小砲の戦暫時之當夜陣同廿一日玉之
井村を發し石筵村にて兵を掛へ三手に分つて会城
に入ル長土の兵を嶽山の中間より猿岩より至ニ我
第一大隊大垣一中隊石筵より左の嶮山を越て進ミ

余が部下は之が道路を執すれ右寄と成り里に至り内
に横合を突んと源山の西方の地形を破り天狗
山撲屋岩といへる二里余を越ルの大山なれハ房内
昇つゝ後に出てし時夕七ツ時此ノ窮つ已に破て進
兵を進撃して大原村の東方に出来る岸本屋村
迄四番一隊進ミしが黄昏ゆえ此に陣を止め此地
より七八町先に京昇つ居り守兵在宅此迄守り
居来て小銃を以連撃ス我二番五字迄大原村を発

し三里の道程猪苗代城に進ミぬ自焼して敵兵逃
逃猪ミも中山口ニ守兵敗走狼狽せる者不少時
は先ニ面りこら此険撲意おゝ幸を以て猪苗代
に兵を諦めは一時に敗兵を追ふて同所ニ至ニ里
余の六北口と云へる橋源に進ミ中山の敗兵落行
しに相踪して防禦の術をなさむと橋已に落し
砲臺を西面に築んとせる央に追撃に及び時ニ門
城備て防戦ハ我軍小高き松山ニ楯を取り利地ニ

伏せて怒発連撃ル強ヲ城ヲ不能とて敵退散し
直ニ河野仲太郎別府清二衆に先して進撃て
各々其砲吉川向に押渡り走る事八町ばかり追撃
して廣野の小高き岳に陣ヲ止め夕営諸隊退て省待
十三日
敵と對する事纔五六町余也翌十三日若松に操
込城内外の戦砲銃の音止む事なく当夜城濠に
十四日
陣を張り同十四日惣る内郭を焼掃ひ町備を厳
にし日を遂て責る小[illegible]して陣を二町余引き

九月
国中して攻撃ル夫々昼夜連撃九月十六日強て城
攻ニおゐて砲ヲ討せんとする兵ルし同十六日守城
於此同十四日若松を發し帰国ス
橋口其勝兼武東征之時第四小隊之戦兵ニ加り
此役初戦ナリ其人強勇ニして梁田籐ニ至て
已ニ始戦ニ及ふ之時大垣の兵猶豫して不
進を兼武一声を發し自ら先ニ進て一隊
を励し如此初戦ニ指揮けるハ実ニ執人の

不及所ニして其気疾事可感哉之央之孫
丸を受ケ當座死ス骸を武州熊谷報恩
寺ニ葬埋ス年二十二
坂元亮之助清堯は二番遊撃隊ニて野州八幡
ニ而初戦ス後第四小隊の銃兵ニ加り東征ニ而モ
人温和の性ニして勇何モ此役ニ埋伏して
敵兵事を論ずるニ策略切なり寡兵なれとも
て敵之不意を討ニ不利ある所通しとなれ共を撃ニ

突ニ進て弾丸二ッを受ケ武州熊谷ニ而埋快
然として詩歌を詠じ平生ニ異ならず宝剣を握れ
ながら三月十三日死ス骸を同所報恩寺ニ葬埋
ス年二十五

三月九日野州梁田駅ニおゐて敵を撃之節手負
後之通

勝ニ深痍　平山喜八郎

頭ニ浅痍　肝付半左衛門

足軽目付

土師荘八郎

頭取源祇

別府唐二僕

菊次郎

中原休打馬尚志第四小隊之嚮導となり為人沈勇にして親尚綱之遺風あり平生酒を好之酔て甚た奇異尤記憶あり操練人員分合を算きる妙技巧を呈

金川初度之役正面に進之奮戦して砲臺際に戦死す骸を金川長壽院に葬埋す年二十

河野彦介道明第四小隊の小頭となり為人直諒

且気節あり金川初度之役流行之眼病を煩ひ芦聖

に帰邸を命せらると然とも病を以此に留ぬを

怒天地を哭詈して既にして其亡る実に今に至て嘆称

せらる此役當番手候の長たり正面に進之砲

臺を指て干此死す骸を白川長壽院に葬埋す

年二十二

深川彦兵衛実秀先に游撃隊にて城州八幡に

初戦之後東征之役第四小隊之小頭見習たりし

為人直諒にして膽略有餘健兒壯士一軍之士毎朱鞘を帯
ひ良銃を以毎戦衆に先んし屡功あり板室村背ノ役
の攻撃尤可感白川初度之役西面の蓬場戦死
其骸を白川長壽院に葬埋す年二十六

二階堂右八郎行信知覺家の三男にして二階堂
氏を継為人素雅にして壮勇の士也第四小隊之
小頭見習たり丁卯年時勢紛擾變を醸その
時實父罹病難に帰國すへきの旨告来れハ

行信云忠孝両全ふすへからすと断然決して帰
國せす翌正月三日之挙動に及ひ六日八幡之戦ニ
宗家の兵隊を指揮せし氣揚稱無し白川初
度之役西面ニ突入し一時砲臺を抜き奮戦して
死す骸を同所長壽院に葬埋す年二十三

赤塚源之進直人第四小隊の戦士たり為人沈
實精悍健歩にして萬程といへとも迪速之卒
生酒を好みて毎戦一瓢を腰に提て寛難之

平氣ニして樂メり赤塚氏古来年二十二にし
て戰死する者直人ニ語り三人嘗云我か旧年祖
先ノ事業を繼りて帝為王事死せんとす哉歎ス
白川栃窪ノ役戰死後は其言ノ如し骸を同所
長壽院に葬埋ス年二十二
池ノ上新八岩行第四小隊ノ戰兵也為人剛勇
有氣據梁田戰場砲手となり格室の戰を切
阿里ヶ川栃窪ノ役ヶ坂我ニ向ひて賊ノ間者を探
索さし挙動するノ切之は役ニ而ノ砲臺ニ進ミて戰
死骸を同所長壽院葬埋ス年二十
田中藤五郎行信第四小隊ノ小隊見習たり為人
強勇膂力有り陣中常に角力を好み衆と和して
能く從卒を撫し從卒ヨリ懐き其風采面
白し小川栃窪の役戰死其從卒骸を負ふて芦野
に送り同所最勝院に葬埋ス年二十六
左近允弥右衛門尚友第四小隊ノ小隊見習之為人

沈毅にして容貌魯鈍白川初戦之役西軍に
在て奮戦し弾丸三ヶ所に被り重創なりと云へ
とも平日に異ならず自若芦野に滝津氏人皆其
氣節を感称し後ち横濱に於て六月廿二日死
し遺骸を東京芝之大泉寺に葬埋し年二十四
林忠右衛門　二男遊撃隊に入て堺村八幡に初
戦東征之役第四小隊之戦士也為人直諒有氣
撃剣を鍛錬して其業を好み銃撃を教て毎

戦毎功不少六月十二日白川において弾剣を被り
ければとも意気勇然なりしに於会津疫痛（病）に罹り終に野
州古河の駅において死す遺骸を東京芝の大泉寺に
葬埋し年二十六
桃川直枝名本肥後熊本之産にして故国を
脱し流浪して後徳川氏親選の列に加り戊辰の当年
報伏郎に属り同年正月の挙動に志操を顕し
東征の時本営に随従して於諸所戦后四月四日

小隊に附属して累戦同廿五日西川福岡にて狙撃
に依をなつて西面の砲臺にて奮戦して死ス
為人性豪和にして膽氣有て風采奇也年
廿二歳と云我必王事の為に死せん臨路を
云とも不良骸を白川長壽院に葬埋ス年三十余
加藤治左衛門其射足遅にして勤労不少会津
攻撃八月廿二日洋藥を発衛して同國瀧沢之邊に
て賊と戦ひ重疵を被り三寿病院にておひて死
須骸を同國に葬る年四十余也

足ニ深疵　　中村直右衛門

右同四月廿一日野州塩ヶ崎村ニおひて手負

足ニ深疵　　森岡長左衛門

右同廿二日同国於沖井村手負

片腹ニ深疵　　平山龍介

同所ニ深疵　　田原奇

手胸一ヶ所深疵　　別府清二

手一ヶ所深疵　奈良原源之丞

頬ニ深疵　鮫島芳徳

手一ヶ所浅疵　深川彦次郎

腰深疵　種子島清之助

足浅疵　井上要之助

足ニ深疵　小田数介

右同廿五日粟野西川ニおひて手負

肩先ニ深疵　久留休拾郎

腰ニ二ヶ所深疵　北郷万右衛

足ニ深疵　仁禮平之丞

片腰ニ深疵　西之原吉彦

右五月朔日同所ニおひて手負

畠山荘八

右同廿五日同國於小田川手負

肩先手ニ深疵　椛山覚之丞

手浅疵　岩山彦右衛

跡山御蔵

林杢右衛門

右六月十二日同國於麻（麁ヵ）嶋村　手負

鉄炮疵深手　永山弥一郎

片腹同断　種子島清之介

肩先同断　肝付半九郎

手同断　竹原宇右衛門

足同断　湯之前藤八

右同廿四日相良球磨攻撃之節付新倉渡村宮山村

両所　同手負

浅手　藤田友次郎

右二本松攻撃之節

深手　付足軽　加藤次右衛門

右宮津攻球磨之節

五番小銃隊戦状　九月廿四日差出

一　四月十七日未明出江戸御府内小石川水道橋見附出張仕候処今一字ゟ板橋駅繰出ニ二字比陸軍所ゟ別隊同附固メ役人共ニ引渡シ当隊ハ交代ニ而致帰陣候

一　同十八日朝五ツ時陸軍所出立四ツ時ゟ板橋ニ而出兵四ツ時ゟ同所探索出張第四字比越ヶ谷駅ニ而駐札并伊賀坂岩槻ニ而筑波官軍打破小山迄敗走いたし古河藩ゟ相招キ申候

一　同十九日朝五ツ時越ヶ谷進軍九ツ時ゟ関宿ニ而右同所藩杉山并新井共々面会城情等探索いたし

山形ニ総出岩井殿ニ一手五六百計ニ而集追々操出
山勢之中中山村ニ付刀根川筋渡シ舟悉取揚在之ニ付
叶ニ不申候ニ付隊より五萬石兵出張迄之進撃之
策を定幸手宿ニ賊兵屯居大垣長州之応
軍ニ約し翌朝ニ叶不開而を発し境ニ賊ニ寄
軍ニ大垣一中隊并ニ隊ニ而之賊中之奇兵人
為幕府五萬石隊長州一中隊并萬砲隊ニ而ツ合テ
三百人計ニ而大概八字比岩井ニ近寄賊ニ而賊兵之
行候ニ出張川辺ニ而衝突候ニ付田地ヨリ中ニ而南ニ向ヘ
散開し討合候ニ付大砲隊并大垣の兵を西ニ

向ケ五萬石隊并長州之兵を左右ニ而攻撃致候ニ付賊
得丸如雨来候ニ付賊兵も暫時支候得共左右ヨリ彼
左右ニ挟撃ニ付賊易く敗走四方ニ散乱致候ニ付
兵を集再進撃之評議之処ニ近賊方
引揚候ニ付岩井ニ而賊兵共百人計余級を
得申候、致退散候賊徒及探索候得共近
村ニ而不残散集候由ニ付五ヶ所ニ岩井ニ境宿
引揚候御用取調候處賊徒ハ討取候ニ付岩
根田宿ニ而杉山村ニ新中出張之人數ニ而出候ニ付
見合之上同宿ニ兵引揚申候

一同廿三日五ツ時分境宿進軍八ツ時分結城城下町ヘ
着則致探索候処賊三百人余ニ而下館城を守居篭
城いたし候段同藩より申出候ニ付長州大垣与談攻撃之策
を定翌廿四日早天ゟ進軍之処賊敗走いたし候ニ付程
退散之様相聞候ニ付廿四日五ツ時分結城を進軍
御之小山宿迄探索いたし宇都宮之方ニ而専ラ砲声
烈敷有之直ニ速ニ進軍いたし候処凡八九里之距
程在候ニ付時分二ツ頃宇都宮ニ着候処既ニ当隊並長州
砲隊半隊大垣一小隊ニ而早天ゟ攻撃相成賊城 三
千八百人余籠城厳重致防戦甚苦戦之様子ニ付

本陣を而町口砲台を奪取追々賊を城内ニ遁隊迄
烈敷有攻附賊兵悉城中ニ追込諸隊ゟ入込候処追
手口ゟ攻入候処賊城防禦之術を失ひ悉敗走致し
日光街道之方ニ落行候ニ付四ツ時分隊八ツ幡山之賊
ヲ追落し一里計追行いたし候日暮ニ付人数悉く
引揚城内ニ陣取八ツ時分ゟ大垣与囲城内を
薩摩因州ニ而備ヲ以御固メ此日賊之首五十人余
有之候事
戦死 上田友輔
一同四月廿六日早天大田原探索致し閣屋迄出張候処
賊之様三百人計当御警衛之備を厳重致し且

山谷ニ架シ及防戦并一小隊ヲ左右ニ分チ四番分隊
城手ニ引返シ四ツ時分ニ及戦争一字計ニ而賊徒
悉追散シ境原迄凡一里半計追討致シ賊ノ
六十余級打捕人数纏揚大田原ヘ一泊廿五日
四番隊兵并長坂ニ兵六百計ト白川坂攻撃ニ付四番
隊為應援白坂駅近迄進軍いたし候処最早四番
隊兵并ニ兵モ纏揚ケ候ニ付不及一戦芦野迄纏
揚申候
一同廿九日應援為白坂白川城ヘ評議之及候処同日当
南之方芦野宿より中ハ不残賊兵ニ而屯集之段探索之上

中出候ニ付右賊徒追拂候後顧之患を絶白川之賊を可
討ト之評議致シ長州大垣ハ[illegible]隊ハ山兵[illegible]隊
一小隊を先鋒ニ進撃致し弥谷之方進撃之筈第四
字分兵ヲ三隊ニ分チ二番隊四番隊ハ白川之湖南
ヲ里棚倉街道ニ出二番砲隊ハ兵具隊三十人計
大垣一小隊本街道ヲ正面ニ向ヒ五番隊并長州
大垣一小隊ハ大砲ヲ擁白坂駅ヨリ左之方ヨリ原ヲ越
黒川村ヘ出夫ヨリ原方ヨリ右ヘ進候処本街道ニハ砲
声聞候ニ付戦争相始候付速ニ進軍一手ハ
白川城西之方ニ立石山之台場を攻撃し一手ハ

東方西面之甚坊ニ向ヒ攻撃シ賊之石山ニ在ル七ケ
所之甚坊ヲ築キ加字計之兵ヲ以テ防戦スルニ依テ味方
殊死シテ戦フト雖モ甚坊之迫ニ加恐ル賊終ニ当衛之
衛ヲ出シ退ク町口之甚坊ヲ守リ厳重ニ防戦ス此
先見三萬ノ隊ヲ大垣ノ一ノ隊ヲ後ト以テ長尾
之賊ヲ追散シ四萬ノ隊ト会シ之石山之後ヲ以テ
町口之甚坊ヲ横合ヨリ攻撃シ賊散シテ敗走ス又
第五萬兵ハ本所ニ陣合ス又二千ニテ本衛陣
後之山ヨリ衛陣ニ二萬ノ隊大砲ニテ備ヘ左右ヨリ
山ニ登リ賊之後ヲ絶チ四方ヨリ攻撃シ賊大ニ狼狽シ

朝倉仙甚之両衛陣ヲ守ル藩兵ハ二萬四萬之
兵ハ小隊又要撃シテ賊兵敗ル討ヤ本衛ニ攻撃
之金勝寺山ヨリ仙甚之陣ヲ越テ敗走ス此
日官軍之兵ニ討取ル首数六百ハ権二級ナリ此時
衛二字比ナリ夫ヨリ各藩談合シテ地利ヲ察シ長
藩ハ朝倉石門之両陣ヲ守リ垣藩ハ要所湯元之
両衛陣ヲ我兵ハ原諸陣之両衛陣ヲ守リ各宿陣ニ
休息シ各藩会シ衛ニ六ル人家ナリ賊之死亡三千
八百餘人

五萬戦死
伊地知清八
坂元仲蔵

河野助五郎
吉川彦太郎

同月十六日

一 今日早天ニ谷四方固場ヨリ砲声頻リニ相聞ヘ候ニ付
茶屋町ヨリ大垣固兵ノ奥ノ方湯元両道共金掘寺山
猪苗代街道ヨリ黒鐡大挙襲来シ及戦争候処二番
分隊ハ六番隊ト二分隊ト合シ金掘寺山ノ賊ヲ
追撃ス当戦ノ際賊大兵ニテ甚タ苦戦候付三番分
隊為応援トシ間道ヨリ沼ヲ越横撃セシ依ニ賊
遂ニ走リ敗走ス四番分隊ハ大垣固場奥ノ
街道ニ応援トシテ左ノ方山手ヨリ黒谷城ヲ撃
一番分隊ハ同藩固場ニ湯元街道ニ応援トシテ
賊ト大隈川ヲ中ニシテ対戦ノ処賊山ヲ越会津
街道ニ出テ打散シ候手一里計追来村ヲ追
撃ス此日賊ヲ討取ル事三番隊第三番分隊ハ
角田村ヨリ応援猪苗代街道ニ出テ帰ル賊已ニ及
敗走候付人数引揚ケ此時ハ概ネ字此前ナリ

一 同月十七日賊見ニ襲来ニ付兵ヲ揃進撃シ未タ賊
四方ヲ固メ候ニ江戸一街道ヲ賊ニ依リ大垣思ニ
兵ヲ芦野白坂ニ分チ往来ヲ軍ノ中備ヲ為シ

賊兵出口土州合四百人計居陸して湯元至徳寺
ニ屯ス故ニ官軍大ニ休息ス処ヲ賊兵見て襲
来て暫砲発ニ及ひ候ニ付官軍総ニ一千
計有之

右之節戦死
有馬十郎次

同日手負ニ而同月廿九日於若松死
大迫市郎兵衛

同日手負　六月二日於白河
病死
伊勢仲七郎

一　六月廿九日二番四番六番長州土州大垣都合
一千計　棚倉城ヘ攻撃致候処賊ハ城虚を向

弐千計ニ而兵ヲ出し翌朝早天白河国府之東街道
並土州同断ニ而湯元街道ハ襲来砲発致候ニ付
候ニ付当方接下新田村ニ而進城ヲ横撃ニ而城
川ニ中ニ而暫時ハ相支候得共終ニ及敗走候ニ付三里
計ニ而露生村迄追撃致候一番隊ハ残変
代人数引揚候而城ニ五番隊引続候ニ付ニ而
白河兵ニ初戦有之

戦死
川崎清右衛門

一　同十五日早天ニ而合大垣国府ヨリ奥州街道ヘ砲発ニ
相成候得共白川街道国府より賊兵一番隊進撃隊ニ而一戦

又代実相寺村之官道を越去ル垣并一番二番正
面ヨリ進戦并小田川村之山手ニ出賊之帰路を
絶要撃ス賊大ニ致狼狽蒐械弾薬等悉く捨
奔り散乱ス此時五十人余討取大田川迄追討い
たし賊三人を生捕人数繰揚ル事大概三字之
一同月廿四日棚倉ニ賊を軍府ニ諸隊ト岩城平
殘上使兵ノ隊ト合し守山三春ヲ可攻之策
ニ決し此村中ニテ応援更ニ御衛兵須賀川之賊ニ候ヘ
足ヲ振掛合ニ之村ヲ出垣河藩之兵数谷五番
計一円撰出評議ニ決し此村青木五月十日生捕三

仙台藩木村市郎右衛門ニ人ヲ帰し進軍之都ヲ須加
川之賊ニ示し右五百計之兵を撰出し小田川驛迄
出張ス賊果シテ抜戦出打ル十三人ヲ討取余を
悉く追散し其時今人数引揚ケ棚倉ニ致
在陣し守軍守山三春を降し進ル十六日之賊
ヲ追掛夫ヨリ二本松城ヲ攻落し此処須賀川之賊
悩路ニ而絶同月廿八日大ニ狼狽し四方ヘ
散乱ス依之八月十五日一番二番五番其外土垣之
兵凡一千計白川撰出二本松帰陣し諸隊ト合
し会津を襲之策ニ候月十七日二本松ニ至十八日

十九日帰陣ニ於テハ玉の井村迄出張不
賊山ニ據且臺場ヲ築キ四ヶ所計ニ兵ヲ出張付
各藩々人数少く深山峻道拂曉大平口兵
兵を三路ニ分チ一番砲兵ニ當リ砲隊ヲ以遊撃隊
并彦兵を保内流ニ向ヒ土州兵一手を猿岩通ヘ一
手を中山通ニ向ヒ彼我以テ路を敵をして
勢を分タしむるの策ニ第十二字人数甚揚リ返
し保内ニ人数ヲ一手ニ相加へ大垣兵一番々々六番迄
ニ一大隊を在近ニ諸ノ越保内流ニ塁を施し
策を定メし諸路を進テ保内ニ賊数ヶ所臺場ヲ

築
○暫時ニ厳敷攻撃防戦ニ及ひ其後賊又敗走ス同日芦
澤村を過キ薩兵御藩半人余討取り同処ニ宿陣夜ニ
大原村民家ニ一泊翌朝早朝四番隊臺場ニ六ツ半時
繰出シ賊兵悉ク追散シ大平口ニ進ミ拙藩代を
追崩シ四番隊此兵ニ隊ヲ揃ヘ橋迄攻ル要地
を取付二番隊并御藩應援進軍翌廿三日
揃ヘ橋ニ諸隊合軍進ミ瀧澤ニ賊数村ニ
追散シ其ニ若松城下迄攻付攻撃甚ダ此時十字
比ニ賊諸所を擺シ城囲を付差攻城ニ備ヲ
厳敷シ其四月九日時ニ付臺場ニ臺攻ニ策相定し

外郭藩士之宅ニ放火焼払ニ日町口之郭ヘ江
出張、城天寧寺口ゟ湯之方ニ迄切寄来ル
同所江ハ会津張城山ニ銃兵隊を以進来候を追
散之同所ニ向諭ニ而藩兵之外郭之諸門ヲ固
翌廿五日ニ至ヲ四番小隊ト埋所ニ進ミ山田山之要地を
肥前勢ハ勢至堂口ゟ廿四日ニ着陣せし
取ニ一番砲隊并肥前砲隊共ニ砲台ヲ築城中江
砲撃セしに於賊討テ出去ヲ及戦争ヲ切兵隊等追崖
翌廿六日ニ至ヲ弾薬庫ニ放火焼払未ダ諸方之攻口江
大砲を分ち日々砲撃セし四方砲声之絶る事
無し往来鎮除路之官軍并本門迄攻入砲撃

本営江行付九月十五日龍十郎時分二番隊五番隊并
一 九月廿二日五ツ時早旦より柳津米沢隊并黒羽隊申し柳津高田之兵と共に諸米
長土肥彦根之諸藩兵ゟ六百余計会津弾正并
及戦争退散降伏
賊之城を追散之坂下塔寺舟渡之城同所ゟ片
門之官軍ヲ追越後路之官軍与合し今在
舟渡宿ニ一泊同日ゟ早朝会津ニ向陣セしに千
五日十六日ニ四方ゟ大之砲撃セし同廿二日秋月手代木
両之城ヘ一出張陳営之事ヲ主人父子之降ヲ
乞同日五ツ時ニ於肥後父子開城降参セし砲声四日
家中一統出城猪苗代江謹慎米沢表根越ゟ
本営詰セしゟ外一大隊并二番遊撃隊ニ放

曳揚申候

八月十二日戦死　山ノ内次郎

同日於松城下ニ手負九月廿三日

於病院死去　大山十郎次

八月十二日死亡

山下助右衛門下人

米蔵

一番遊撃隊戦状

一閏四月十七日上總國八幡宿ニ而暁四字比本道ニ而番兵ニ賊兵
ヨリ発砲致シ候故即戦争ニ及ヒ攻撃ニ及山手浜手ニ悉
散隊ニ相分キ進撃致シ候処五井宿ニ迄出張ノ賊兵ハ追々散
乱夫ヨリ養老川ヲ打渡リ急撃ノ追撃ニ而近隣ノ村
村ニ屯集ノ賊兵モ頻ニ防戦ニ及ヒ候得共悉敗走シ勢ニ乗シ猶
官軍ハ縦横ニ追撃ニ而大概昼十二字比姉ケ崎ニ而四里程ニ而
急ニ劣シテ進ミ候処姉ケ崎町口ニ三ケ所ニ砲台ヲ築キ賊
必死防戦ノ勢ヲ示シ備ル街道ヨリハ大砲守座山手砲台口ハ二番
隊浜手砲台口ハ一番遊撃隊ニ而攻撃ニ及ヒ候処暫時ニ接戦
ニ而三ケ所共ニ一時ニ攻抜即追撃姉ケ崎陣屋ハ勿論市中
悉踏破リ七八町程追撃ニ而賊兵ハ四方ヘ逃去一人モ無之早夕

刻ニ及ヒ当所帰ル崎府ニ止陣也

一 五月十五日東京湯井郷より暁四字大下馬ニ至ル相揃同五字前探
索トシ湯島天神近ヲ筆ニ至ル相賊兵屯集ニ於テ即上野黒門
前広小路通三枚橋ニ探索ス然ル賊兵大砲二門ヲ備居即
戦相始メ発ル我軍正面より攻撃ス又少時三枚橋ニ探索
居ル賊兵ハ直ニ逃去リ悉ク山内ニ籠リ居黒門ニ橋ヲ取双方
撃合其ニ於テ大概昼三字時分黒門前ニ相至ル我軍引續正
面よりも一時ニ踏込ミ賊兵悉敗走山内ニ至リ火ヲ放ツ防戦致し
此時兵士雖攻掛夕四字過止戦ニ相成ル山内寺院ハ燃ル焼払ヒ
夫より各隊列を備へ湯井郷ニ帰陣致し候也

一 六月十二日朝六時分奥州白河陣ニ而石川街居番兵ニ賊兵
襲来ニ而四番隊ハ中途防戦ニ及ヒ候処賊兵ハ左右ノ山岳ニ登リ頻リ
ニ発砲致シ候処正面より大砲ヲ掛右両隊を以半隊ツツ左右岳ニ
探索シ三時程接戦ニ而終ニ賊兵悉敗走ニ而逃出シ即正面
並左右山岳より撃落シ追撃十町程ニ而賊ヲ数てつ打取候故
夫より兵ヲ引纏め白川陣営ニ引揚中段大丸営ハ追ニ止戦
相成候而帰陣

一 八月廿一日暁二字比奥州二本松領之内玉ノ井村探索シ石筵ニ
至ル所ハ朝五字比居陣致シ候処ボナイ峠砲台在ル故与昇
然兵先鋒ニ掛リ續兵具隊並ニ一番遊撃隊同じく正面より
攻撃ニ及ヒ候処賊兵ハ少く小高岡ニ砲台ヲ築キ正面より掛致
ス大ニ嘆キ加ル故ニ右手岩川ニ下リ右手高き岳ニ馳登リ接戦

撃候處西面よりハ大砲ニ而一同ニ掛り候故一ニ砲臺共ハ即散々ニ打崩
夫より續て西面よりも進撃二ノ砲臺ニ攻撃ニ及ヒ處暫時手
強き防戦致し候得共貝隊と申談右岩より深谷ニ下り
谷川ヲ打渡り夫ヨリ西面之大手ニ而砲臺之下迄攻撃踏入候得共正面
よりハ地理悪く勿論廣野ニ而隠れ所無之場所故砲臺右手ヲ馳通
り右横より砲臺ニ迄撃ニ及ヒ無程賊兵狼狽ニ及悉敗走ニ而其
雖是ヲ以テ縦横追撃大概夕五字過ボナイ峠関門迄
兵ヲ引揚ケ止陣致し候也

一

八月廿三日暁一字過出津領之内稲葉城前隊ニ而朝五字
比同所出張之岩陣即三番隊番兵ニ而近傍迄居候処早
賊兵より發砲ニ及戦争相始り候処直ニ賊兵敗走ニ而逃出シ官軍
一同本道より追撃候処不ニ砲臺共も築き居り候得防戦之都合

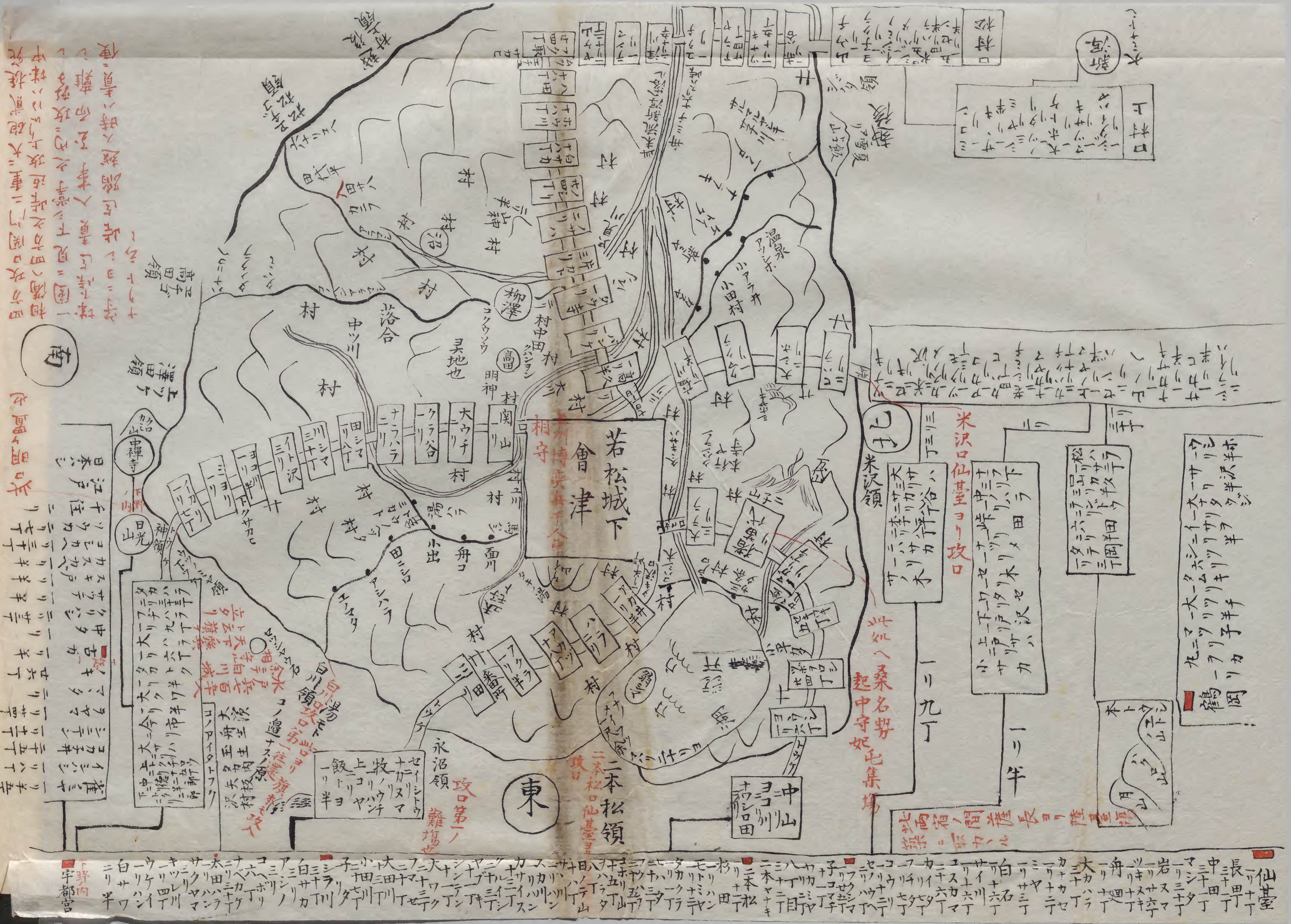
これ不立至同朝八字時分兵城台塁迄登筆ニ而一番遊撃隊
ニも大手口より攻撃ニ及ひ処台塁口ゟ無間攻抜き内塁城口ゟ
迄登撃ニ及ひ処城塁方より頻りニ賊兵發砲致し候得共城口ニ踏入
候ニ付ハ余計の兵ヲ損し致し候故勢ニ而城塁へ向攻撃致し居候処大概
昼一字比落去土一小隊ヲ以城ニ居り為め斥候隊探索し城塁
様ニ川有之場所ニ而右川ヲ打渡川向ニ屯之賊兵与戦居候折
柄城中より俄ニ鎮隊一百五十計り突出手強く及接戦之様子ニ候得共
過半ハ撃斃余ハ悉く逃去候故余り単兵ヲ以テ追撃ニ及ひ候ハ
地理も無之味方勢不都合ニ付夫々兵ヲ引纏大凡四字時
分ニ大手前ニ引揚ケ晩迄断攻撃致し候也
右廿三日已後ハ暮迄攻ニ而一同番兵ヲ張降伏迄之日三十日

程遠戦ニ当リ此度別段ナル手柄ニ勤務シ此者　右件当社

五月

一番遊撃隊
隊長
監軍

金山寺山ニ攀登リ賊を散々ニ追散シ得鯨声
を揚て此所をおさへ四方を見渡シ官賊ニ戦を
我兄弟此時此隊ニ負戦死者し賊軍ニ与フ故



若松城下
會津
南
東
二本松領
米沢領
永沼領
白川領
米沢口仙臺ヨリ攻口
落合
柳澤
中禅寺
日光山
仙臺
宇都宮

程遠戦ニ当リシ此兵別段ニ賞シテ勤功シ此段

高橋孝蔵

云清生状

兵具隊川路西之進戦状

一 辰五月廿六日白川ニ賊襲来

斯ル時仙台衛兵大垣之堡ヲ以テ賊襲来リテ攘キ我
隊ハ持口ニ出前リ稲荷山ニ会ス従是義集隊
共ニ賊ニ当リ味方ヲ眼下ニ見テ押掛ケ
方我隊ハ堤之裏手ヨリ川ヲ備テ山上ノ敵トナル
左ノ山ヨリ大垣指揮ノ兵人右ノ山ヨリ味方ニテ取粗
撃チ我隊川ヲ押渡リ錯指キ人ニ而賊ノ登リ居
稲荷山ニ攀登リ賊ヲ散ニ追散シ捕鯨
ヲ揚テ此旗ヲ立テリ四方ヲ見渡シ官賊之戦ヲ
取見ル此時此隊ヨリ負戦死無シ賊軍ニ三ヶ所

散シ七ヶ所ヨリ忽チ賊軍戦ヲ止ム賊之襲来之指出人案

一 仝
辰五月廿七日奥州白川ニ賊襲来
此隊ヲ先ツ総指揮三人ニ而一小隊之場ヲ受庭ニ
寄リ諸兵ハ故史卒度之兄張ヲ致シ候ニ半
時分ニ暫時陣営致休息候処賊棚倉口ニ
而見得候注進有之我隊も早速持場ニ操出侍
掛ケ候処八ツ半比合之悦志之義集隊ニ而賊
会津口ニ押寄せ来リ我隊ヲ当ニ戦ひを始メ武
当隊も此持場ニ応援として農兵砲官賊掛致ス
出会暫くして何も進めしと声を掛ケ詰メ寄り

賊軍色めく所ニ目当ニ鯨声を揚大谷地村之
方ニ而賊営放火し営之時引揚申し此隊
手負　寺崎覚之二
賊之襲来之節指出人

一 仝
辰六月朔日棚倉長州ニ而応援
長州兵人数三名泉田迄ニ巡邏として若賊仙台之
賊ニ而掛リ候ニ付援兵申来リ我隊早速根田迄
参り候処長州兵大垣兵共早引揚ケ之所ニ候
逢ひ我隊直ニ応援来リ候ニ付一戦を遂ケ候処
中ニ入し長州を右之山ニ登り土州ハ正面此隊ハ

右之山ニ登リ候処長州之登リ口右之山ニ賊兵
ニ登リ打掛ケ追々賊兵三方之山を取切リ
味方及難儀候ニ付営ニ引揚候ニ付其を以テ援兵
申来候得共深入ニ而我兵早速引揚候由申来ル
より深川ニ而引揚ケ候得共賊之死傷有之候ニ付
味方長大垣六ト郎死手負四五人有之候のミニ而
本営ニ引揚

一仝
辰六月十二日白川賊襲来
未明ゟ白川諸口ゟ賊襲来候得共我兵其隊を揃へ
村ニ立向ひ候処諸藩之二本松棚倉会津等之賊
此方ニも寄手隊共四番隊と相成我隊ハ二手ニ
成リ壱手ハ川手ゟ桜ケ岡ニ賊を討払ひ壱手ハ揃
へ村之山ゟ取リ登リ賊ニ接し打合候処却而
味方鯨声を発し一時ニ追掛ケ賊数人ニ及出し此
度之会藩棚倉藩并棚倉藩川浦矢之助他
甚藩何某を始として賊之首級多討取
候我隊

右□□村　□□即死
黒田運二

右桜ケ岡ニ而手負
永井喜三郎

兵具係川路正之進状

一 辰六月廿四日奥州棚倉ヲ攻撃
惣軍三字白川ヲ操出し我隊も畑宿ニ而賊兵ニ出合
畑宿ニ而黒羽人数と合し夫ゟ三ヶ所ニ相馬棚倉兵と
賊兵我隊ニ而迯ケ隠レ当国兵到り候処早速ニ合
其所ニ而当方当隊台場を破り候所見合黒
羽を案内として我藩兵ニ而問候ニ付棚倉の裏手
を討破り城中ニ討入り候処賊ハ既ニ城ニ火を掛迯
ケ去申候

仝
一 辰六月廿五日奥州白川郡釜之子進撃

朝七字薩長土之藩ニ而順次ニ関ヲ取リ　土薩長ト
共ニ進ミ我兵具隊ヲ以藩ニ先鋒各藩順ニ進軍
白坂宿ヲ過村ノ橋ニ而賊ト藩ニ与リ浅川ヨリ
須加川賊徒ヲ討掛リ候処賊軍ニ攻戦ニ及ヒ足
ヲ留ルニ至ルモ許シ夫ヨリ百姓ヲ案内トシテ峯ニ而
之一里余ノ間ニ於テ兵ヲ左右ニ分ケ我隊ハ先ツ峯ニ而
討入候ヲ打立追散シ賊ハ川原田之方ニ逃ケ散リ
申候而右ニ賊ハ右田領之館主ハ賊軍ニ与シ候由ニ而
不日ニ在ル賊徒与シ而陣屋ニ火ヲ掛ケ帝中ニ而焼払
申候又我隊之日ニ引揚ケ候処賊兵ニ引揚申候此日
敵ニ逃ケ散ル所ニ而薄手少ニ怪我人無之

兵具隊川路正之進戦状

一六月廿九日奥州白川郡　川原田追討
我兵具隊並黒羽藩相会シ分隊ニ而白川郡堤村ト申所ニ
致轉陣当所ハ元地理兄トシテ奥城ニ而峯ヲ子ニ屯
賊襲来民屋ヲ焼キ引返シ候ニ付早速探索黒羽
勢モ相進シ追来リ候処栗形田ト申所ニ而我隊ヲ三手ニ
分ケ引包ミ麾下数ニ策ニ而押寄候処賊ハ逃ケ去リ候ニ付
賊ハ白川郡川原田村ニ而賊兵陣ヲ張候ニ付の由承リ
黒羽勢申合六七人斥候ニ而　川原田村ニ而南ニ岡ニ
登リ候処賊ノ陣所川ヲ隔眼下ニ相見ユ之町井ニ而候処モ
大砲打掛ニ相図ヒ此九ツ時之字比我兵具隊並黒羽

三小隊大砲弐門館林一小隊深堀に川原田の南なる
岩の上に黒羽之大砲弐門を備ふ館林一小隊を指揮
そし銃隊を率ひて川端に伏せ暁霧の晴んを待て
大砲を以発する迄に銃隊を見せ置き鯨声を発し
河ぶ熊川を押渡り川原田を一すかりに討破り
夫より二子塚村に討入り放火致す時分又黒羽之兵
隊を構へ白川より通路を破らんとて所にある
戦ひ陣に我隊之斥候田中藤太郎と申人ハ深仁田へ
戦ひを始め賊を追ひ掛ケ河原熊を渡り途に関和久を
追ひ賊営に放火して徳川の小径を登ぎ二本松に向ふ

然ルに仙台兵の一小隊を追ひ散らし本隊を分ち藩兵
新地山筋を右に登り茂る姓之様方白川より三里余り先の碑
通路お関所常夫より諸氏ともに繰ひ白川より帰る
若黒羽之兵ニ戦ひ賊ともに狼狽関和久元沢南川
東ニ所諸所ニ賊兵引退ケ立官軍之追ひ打とて切ッ矢
吹鉄ニ与を味方ニ右敵巳に陣に放火須加川より
本陣より仙台兵引退ケ走り須賀川へ出で若我
隊中ニ与お出申し

兵隊川路正之進戦状

一 七月十六日浅川応援

未明より浅川表土河原彦根之陣江賊襲来大小砲之響キ相達シ柳倉之方ニ詰居候ひニ付而偏ニ仕候注進もこれ無く然ル處兵を以テ討破らんとの事ニ而我兵之隊六拾人黒羽隊之拾人都合百人斗り時分纏メ賊之後より出て窺ひ賊ハ浅川之古城元西手之山之一面ニ屯シ土河原彦根の陣を眼下ニ見おろし大砲ニ而其山頂下不遠ニ進ミ左西山ニ登り居り候賊をひと討ニ進ミ候らし進テ川を押渡り古城之賊ニ向ケ三方ニ進撃九ツ時分浅川ニ賊ハ引揚陣仕候皆

右古城之西高キ所ニ手負

川路正之進

緒方藤之丞

右仙台賊首軍ニ申ヲ越居路傍ヨリ不意ニ切掛候ニ付
持居ル鎗ニテ右之者ヲ一突ニ突ナリ其時同隊田宮[実]小四郎右
刀下ニ入賊ヲ組倒[倒カ]シ自分ナカニ斬リ切留ルヲ相掛ケ
掛ケ此者ヲ永理源之郎短刀ニテ賊ノ所腹ヲ差シ
を深手あひ候も太刀を振り賊を討留申候　右之丞此賊之
仙台白山源三郎と申者之由ニ御座候

一　兵具隊川路正之進戦状
一七月廿九日奥州二本松城落之
五字比ハ本営小浜之惣勢二本松城ニ向ヒ我隊ハ小
浜ヨリ出陣ニ而所々続テ賊川を渡て発砲致し本隊
を相撃いたし本隊ニても当ニ阿武隈川を押渡り兵をま
とめて高倉賊軍二本松竹田門ニ攻掛り外門を
大砲隊ハ押破り内門を押破せ兄破れ候故我隊ハ小銃
并萩原十吾塀を越し内ハ柵[檻]を引抜き城中ニ攻入
此時大手の門を未破さる故賊我隊を味方と見て
駈来り討ヌルニ其の相図シ抗呼字比叉兵隊ニハ
二本松藩家老高根三右衛門并同藩物頭小川平助を討

一 右ノ外此日我隊戦死
満岳福次郎
藤崎宗八郎
嵯峨吉次郎
伍長岩城平兵衛之卒

生捕六人
二本松藩
滝話竹之郎
右同 高根三右衛門家来
金助
右同
長之進
右同 小川平助家来
喜人
右同 丹卒 本営出
岩助
右同
喜人

兵食係深川路正之進戦状
一 辰八月廿三日会津口ボナリ破り
二本松を発し玉の井と中山に到る時休息致す式
而して段々発す所遊撃隊並我兵食隊中野三山隊ボ
ナリの本陣へ繰出し処忽ち賊の台場より発砲有之遊
撃隊並我兵食隊出張をつとられ右之山へ攀登り
出張賊大砲を打掛け候所民家を焼き払ひ台場の
うへ乗取所にて兵之を聞き又発砲賊軍色めき所に
此藩之援軍も続き来り当時ボナリ山に接近候而
之台場へ分賊発砲官賊激戦して戦ひ之字此賊を
残く追崩しさる日援軍ボナリへ出陣此隊即死

一　兵之隊川路正之進戦状
日廿二日寒津猪苗代　并十六橋破り
ボナリ六字比操出し此日も我隊九番隊と先鋒を務
九番隊ハ右後より四番隊ハ後援　猪を字比我隊猪苗
代之城下を番ニ攻入り　若松へ二里計し　十六橋
を猪苗代湖水之急流要所ニ而守此橋を落さんとて
兵隊ヲ以て敵勢橋を切り掛ケ已ニ危き所へ四番隊と
共ニ我急撃致し討破り此夜野陣ス時ハボナリ
の路を破り此より十六橋を占し若松を至ルハ一
挙ニ有りと官軍の勢ひいさん方なし　此隊死傷
なし　賊兵皆倉や

町来し
岩右衛門

一 仝

同月廿三日会津若松討入

六字聖陣を発し此日先鋒として各藩引續き若松城下に攻め寄せ本営城下に進り我隊も本丸大手口に攻撃致す計に攻め込み兵籠城に引取り賊勢城門を厳守し大砲小銃を花火の如く打出し來り我隊の大砲を以て頻りに發ひ暫く苦戦に及ひ此時兵死傷も人も許多此所の砲台より夫々城下に向の方に於て取巻き如き當極撃隊苦戦に我隊狙撃致し狙撃共力を盡し死傷者を揚け此隊後方にて揚け此日官軍諸口を取巻賊城攻撃に取り進み其後戦争止み申し

一 仝

八月廿四日会津大窪山追討大砲狙撃

八字比各藩兵此藩我兵隊は此日大砲狙撃に八字比出し官軍城下の東なる大窪山に攻寄せ進み山上を依ち原ち村にて戦ひ能く如城三百人許據出し我隊も大窪山の麓より進ひ時に賊兵を敗走し官軍大窪山の要所を占メ式所に大砲を備へ若松の城を眼下に見おろし是々當社大砲を以て城中を囲み戦ひ申候

右隊手負

相

聖藤次郎

一（仝）若松詰 諏訪山土州応援
未明ヨリ土州并大垣共ニ堅メ居リ諏訪山邉ニテ城兵撃出
ヨリ土州及血戦土州勢右ニ応援トシテ深入若我
手我兵モ隊応援トシテ九字比ヨリ操出シ打戦ヒ城
ヲ堀中ニ追込土州勢ト伐リ我隊後敵ヲ揚ケ申シ
此日大会戦ニ而官賊死傷夥敷有之此隊ニハ死傷
無之

一（仝）
九月朔日会津越後口ヨリ三川裏破リ
越後口ヨリ三川ト申土川ニ而賊勢台場ヲ構ヘ越後
口ノ官軍ヲ打防ニ付追討トシテ各藩并此藩ニモ
我会藩隊出陣ニ付指図比若松ノ営ヲ発シ候人数
用ゐニ而打戦ヒ悉ク追散シ又ヲ討取リ行程
何里半程揃孚比夢川ニ到リ此ニ賊屯川ヲ渡テ
越後口ノ官軍ト打戦ヒ当日ヲ後々并立散ニ
追散シ越後口ノ味方ニ旗号ヲ合セ来テ呼
ヨリ我隊并武州右共ニ前面ニ入川ヲ渡リ塩津
小手ニ而引合尤人合我隊ノ諸隊ニ出合半ヨリノ事
迄引揚ケ爰一泊此所ヲ打堅メ翌六日各隊同様
若松ニ帰陣此戦ヒ此隊死傷無之賊ハ逃ケ散
山之谷指人侵ル撃死シ此手

一（仝）
九月十七日若松ヨリ木村出村

去ル十四日此城の南ニ当り青木村ニ屯集之賊
徒追討として此藩ゟ七番隊并佐土原兵隊
右之城中ゟ打出味方小勢ヲ苦戦ニ付之及
各藩申合長土大垣ヲ日光街道川手ゟ迫り
此藩ニも七番隊并佐土原先鋒ニ而会津一小隊
ヲ以テ隊ヲ本村ニ向ひ我兵之隊ヲ苦戦ニ而
其兵軍議ニ而大窪山の麓ニ於テ待ひ兵を上
大垣兵も進ミ候九字比ハ発砲ニ及ひ此方も大窪
山を攻取り我兵之隊も合の如く各隊ニ而後ニ出
本村ニ而手前ニ至り賊ニ発砲ニ早く迄ニ応し
三方ゟ挟撃り半隊計ニ而強し至屋ニ山ニ而発り

賊を追ちらし其際ニ而兵を海と見ん石村ニ而
砲発ニ而苦戦佐土原勢苦戦ニ而爲一郎始として
手負数百諸方ニ致砲兵ヲ揚テ其ゟ西之勢ニ
在事ニ而会津小平太会津式部介掛しとの令ニ而我隊
一時ニ勢ヲ発し強立一戦ニ追散し我隊ハ日ニ
敵ニ而首…ニ陣取り此日石村の寺院ニ
会津内蔵助…之火始として男女老幼凡八人
ひとつ所ニ而自殺賊…も見しニ振舞
兼而其院ニ火を掛ケ申し此隊兵備…賊の死ニル
ものあはれ之人 云々

小隊長之備
川路正之進

半隊長之場　篠崎彦兵衛

私領三番　加治木隊戦状

江戸表ゟ急ニ付而応援当隊一小隊并三小隊
而軍被仰付八月六日前の浜出帆同十四日品川
沖江着船直ニ御届申上然処右四小隊共ニ滞陣
被仰渡酒井雅楽頭屋敷ニ宿陣候処ニ然当隊迄
野州藤原口ゟ会津を撃被仰付同十四日発
野州宇都宮ゟ同藩二小隊参し同九月二日夕
会津城ニ五里余方之大内村江着陣以而然
中村半次郎ハ御軍監ニテ同所ニ先達而致出張
居候ニ付会津城之行程二里余の所大内峠ニ火玉
峠トモ云　会城籠居ノ藝肥其他攻撃為半之出張

三日未明同所猿ヶ岳より寄候出ル処十町
位の所街道を中ニ至左右山岳要所ニ賊伏居ル
方当隊宇都宮黒羽館林の人数山岳并道ニ砲打
いつれも当隊先手として午刻過より烈敷砲戦
ニ及ひ就中九野伴二岡山平吉稲垣彦五郎事太
刀討ニて賊数五人討取彦五郎ニハ一人の首級
を揚ケ二人ニハ疵ニ手負九死一生の場合ニて
敵を免候ニ付重日高清太郎ニハ日の丸旗指
揮携ハ諏訪式之介と云者ハ砲撃いたし曽米
彦二郎田勘之丞事も続て同所賊首を揚候ニ付一

同番勝労血戦いたし御指揮等許多有之候故山
中のことにて数ニ相分味方隊も山田司始死傷甚
賊之通ニて夜中迄致奮戦既ニ名藩当隊宇都宮黒羽館
林中津今治御条山岳本道ニ分砲矢発当隊先鋒已の
刻頃より必死砲戦賊を寄て攻撃ニ及ひ小濱
米之丞賊首一級を揚指揮等御伴通山林の陰ニ
て数しれ右味方ニも五人手負申の刻頃迄ニ賊
巣窟ヲ攻抜同所より十町余の所栃本村開山村
へ放火して烟焔の紛れニ追々敗走いたし本山
村迄を撃各藩宿陣同五日未明各藩一分隊ツヽ

作候ニて進軍の処名坪より一里位手前大川ニ
ニ而知渡渉殊更朝霧深く恰も夜陰の如く作候
川央を渉候時果て賊川向江埋伏互ニ砲戦同
暫時之打渉り賊追散し同所より名高屯集当隊宇
都宮より小隊作候と相手若松迄進軍の途々諸所
民屋等より狙撃いたし候を一ゝ打払若松本営
江午の刻時分着陣御届申上候処龍花寺ニ宿陣
相手候跡越ニ右屯集の名高江城出張仰戦争為
致申候乃其夕方着陣ニ而候左候而当隊ハ旬
論相得藤原より討入候諸藩名隊名坪南の方

半里余の所飯寺村江致陣営候様被仰付翌五日
巳ノ刻時分より合撃いたし飯寺村ハ素より五
奈近辺民家江討入賊数十人打捕賊ハ追散し隠
伏致急の民屋ハ焼払飯寺村并郭内名藩夫々持場
を定屋庭致番兵居候処同八日坪中城迄及ひ其
周家老山本帯刀主将ニて南北双方より襲来いたし
暫時砲戦甚劇敷ニ右帯刀外十三人宇都宮
手ニて生捕於当隊も数十人討取賊城迄払凶時
柏原吉左衛門外一人致手負同十四日惣攻坪外
節川原町口より攻掛須臾ニ城坊戦の台場数ケ

所寄ニ而節末良清次郎討死外一人手負尚進て
南城門間近く討入直チニ仮台場を築き登城之
戦ニ相成居候ニ而為応援致出張候得共御
座候然処同廿二日降参致し城御請取之上各藩
交代守城ニ相成居候処同十月二日御手勢計
仙台江発向被仰渡二本松等江滞陣同八日福島
迄進軍の処彼レ降伏の由依而各隊ニハ東京江
御引揚ニ相成当隊迄同所江滞陣隊長野津平左衛門
外事仙台江被差越兎角依動静を退の御命令有
之外相済候処同十四日京都より凱陣被仰

渡直ニ出立同廿五日東京江着陣同十一月三日
より東海道江相掛同月廿一日京着仕候処同日
四日
御所江被為　召御褒美并御酒肴頂戴仕同日
若宮様　御目見且　御手自御酒肴料拝領被仰
付翌廿五日御暇被下同廿六日暁着坂同廿八
日乗船同晦日前の濱江着船仕候
一戦争の大略ハ時々東京徴兵府并白川口本営江
御届申上置候
一別紙死傷名書差上申候右の通見聞の形行申上

候以上

辰十二月廿四日

加治木一小隊
監軍　上原善兵衛
　　　國分藤之丞

加治木小銃隊

戦死　山田司
深手刀疵　君山平吉
浅手　柚木荘次郎
同　柏原治右衛門
深手　伊藤西助
浅手　福永十郎
深手　福永十次
浅手　松田源之丞
深手　福永弥七郎

同銃卒　丸野仲二
深手　日高喜三郎
浅手　吉岐小三郎
同　牧六左衛門
深手　松田宗次郎
夫卒之
浅手　紫蔵助
右拾五人事當九月三日於大内死傷
深手　日高蔵之丞
浅手　土橋栄吉

同　曽木仲之助
同　松葉新蔵
夫卒之
同　喜次郎
右八人事同日於日向手負
夫卒之
戦亡　甚吉郎
右同日飯寺村ニ
深手　柏原喜右衛門
同　石原七郎吉

右ハ今日於飯寺村ゟ手負

銃死　米良清次郎

右ハ今日同午時攻撃之節死傷

浅手　青木彦二

夫卒之　浅手　伴助

夫卒之　同　勘吉郎

右ハ今日飯寺村ニ而篝火用薪持運之節銃丸ニ

行逢手負

一 山田司事東京大宮寺ニ葬方以之仮葬之

助日高春次郎　福永弥七郎事於横濱ニ果

此村同寺ニ同断　相原去月石原七郎右之

品川ニ而果同所ニ同断　米良清次郎儀ハ

会津ニ而同断　錦之石塔建之度奉存候

右之通御座候以上

辰

十二月十四日

加治木一小隊

監軍

上原昌花

國分藤之丞

書出六番隊戦状

一 私共一小隊戊辰八月廿八日越後新潟ゟ岩船郡新発田出張
庄内領ニ而米澤ゟ之先鋒を蒙り直ニ進軍ニ而於
中途降伏ニ相成候ニ付進軍九月十七日若松城下ニ
繰入候而城外青木村ニ織屯集いたし揃子ハ之
攻兵ヲ廣右之織兵退て進撃ニ而事を城中より
致應援賊軍頻ニ及苦戦候ニ付同十七日夜ニ進
撃致し候処應援押之城外三町位ニ而備ニ而田畦ニ
伏兵通路を防切ニ而城兵ニ攻懸ヶ且發砲互ニ打合
打合候ニ付青木村之織潰敗いたし候故右田
畦近邊ニ而後ニ臺場を築造ニ而居速ニ攻撃致し候処

同月二日関城降伏ニ付此段概畧御届申上候
当兵六番隊
監軍
千田七右衛門
伊地知源右衛門
巳
正月

諸與遊撃隊戦状
一　此度御征討ニ付諸組遊撃隊越後口ニ出
軍ニ付御付軍切中ニ隊中ニ調中出張ニ而候越後筋ニ
仕居候中去ル八月十二日前之濱出帆ニ而
同月九日越後新潟ニ着船並ニ上陸ニ而新発田ニ
第ニ越中ニ而米澤ニ攻掛ル様ニ仰付大島村ニ
第ニ相而先鋒ニ仰付探出進軍ニ而米澤降伏ニ付
仰付城下ニ兵隊繰入ニ而会津ニ出兵九月十三日中
途ニ而為仰候本田伊右衛門若年寄孫九郎ニ戦
兵ニ而指ヘ速出立若松城下迄ニ而越後口ニ
以龍城之事後引合天念寺口ニ陣取居候処ニ戦

砲戦ニ及ヒ隊之儀ハ同十六日探索ニ出候処堺ニ於テ日
光口迄参り候付一隊ニ而見ル處台場築立居
候故砲戦同日六日隊伍守同日迄ニ右築場
引揚ニ相成夫ヨリ六日町口并同所口甲賀町口
警衛被仰付翌日参り候處同所并仙台之応援として
在陣之儀御用掛被仰付同十九日出立塩川ニ陣取
候処墨羽之坂ニ降伏ニ相成猪苗代之若松引
返候処根後ニ寄而三字御本陣之處ニ而若松堺内警衛
并本陣中ニ而陣立候論滝沢警衛之所被仰付
相成ニ而引揚候處隊引揚根後十月十六日若
松堺出立之

私領四番宮城隊戦状

私領四番隊出陣中戦争之次第巨細可申上旨
御達ニ付左之通申上候　宮之城
辰八月廿三日鹿児島之浜英船ヨリ出陣同月廿九日
越後新潟ヘ着陣之処前ヨリ諸所降伏ニ相成居候米沢
ヘ着之処翌日出立以同所九月十五日会津若松堺
下ヘ着陣即刻ヨリ同國　村番兵被仰付翌
十六日六字揃ニて私領四番隊御兵具隊一小隊
佐土原之小隊土州一小隊進撃可被仰付旨策謀
ヨリ間合ニ速命令通南之方堺権吉木村と申所
ヨリ進撃之処賊軍塁等ニテ諸所ヘ台場を構ヘ

手強致砲發し於其場間も打数之進打まて一里半
位も以半面川下中所近攻寄候処賊勢二千人計
も可有之哉左手山中へ備立諸所より致砲討暫
時戦争五字過ニも相成候半哉引人より賊軍
最早山中後之方へ落行候ニ付寄手兵隊可引揚
段申来も形も場引取営六字時分古吉木村へ陥
陣掛居引人より当村宿陣番兵ニ而ハ根謝り
別より甚場等藥立並探砲打合同夜二時過中
隊稍相事必罷砲發ニ而ハ写出言之謀より廻文
右達之隊中之儀者戦死手負之者無御座候夫よ
り同國猪苗代隊人警衛且又洋番市中巡邏等ニ
付暫滞陣ニ而ハ此節東京へ引揚東海道より大
坂ニ出又ニ英船へ乗付同十二月三日帰着ニ而
ハ此間戦争之於彼地御座候以上

私領四番隊
小隊長
日並宗右衛門
巳三月
右同
監軍

鎌田金之進

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan